
BLADE × ARMS

六花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BLADE × ARMS

【Nコード】

N6457S

【作者名】

六花

【あらすじ】

御剣学園を舞台に、手に汗握る闘いと悠姫くんを中心に繰り広げられるワンダフルコメディをお届けします・・・

第一幕 〈何気ない日常〉

ここは神奈川県水無月市

そのほぼ中心にある高級住宅街

けして、広大な面積を持つ邸宅が建ち並んでいる訳ではなく、シックな造りでそこそこの大きさの建物ーと言っても、もちろん普通の二階建ての家よりは遥かに大きい建物ーが規則正しく並んだ美しい街並みだ。

いつもは静かな住宅街だが、今日はその静寂を破るように言葉の応酬が聴こえてくる。

一方は少年だろうか・・・

歳は十五、六くらいに見えるから、高校生だろう。

理知的で生真面目さが窺える容貌、ずば抜けて高い訳ではないが百七十半ばはある身長・・・女性がすれ違い様に思わず振り向いてしまうぐらいの美少年だった。腰まである長く艶やかな髪のためか、美しい女性のようにも見える。

もう一方は二人の少女だった。

年齢は少年と同じくらいか、それより少し幼く見える。

双子なのか二人ともよく似た顔立ちをしている。一人は優しげな栗色の長い髪をそのまま背中に流しており、後ろを少し大きめのリボンで結んだ、何処と無く大人しそうな少女だ。もう一人は先程の少女と同じ栗色の髪だが、その長い髪を後ろで一つのまとめている・・・

・いわゆるポニーテールという髪型だ。その髪型の所為か、先程の少女に比べて活発的な印象を受ける。印象が大きく異なる二人ではあるが、共に美少女であることは間違いない。

そんな三人の・・・いや一人対二人の口争は、なかなか終わりを迎える様子はなかった。

やがて、この無駄な言い争いに疲れたのか、少年はその茶色みがかった髪を掻きながら、言うことを聞かない少女達を睨み付けた。

「いい加減、出ていく気にならないのか？」

よく美人に睨み付けられると、その容姿も相まってたいへん怖いと言われるが、それは男にしても同じことが言える。

切れ長で少しつり上がった眼・・・その眼に睨まれたら、たいていの女性は怯えてしまうだろう。そうでなければ、竦み上がって動けなくなるだろう。

だが、この少女たちは普通ではなかった。

見えていないのか、気にしていないのか、それとも『そんなところも素敵』とでも思っているのか、一向に気にする様子はない。

少女1「もつちろん。私たち、ここに住むって決めたもん・・・！」

少年「何勝手に・・・」

少女2「すみません・・・ですが、帰る家ももうありませんし、どうかここにおいてもらえませんか？」

涙目と上目遣いの必殺コンボ・・・

話を途中で遮られたにも関わらず、燃え上がりかけていた少年の怒りが終息していく。

いつの時代も男はこれに弱いものだ。

少年「うう・・・」

何故、こんなことになったのだろう・・・？

少年はそう自分に問い掛ける。

この少年・・・朝霧悠姫の運命が狂い始めたのは、忘れもしないあの日・・・

一週間前の、ちょうど今日みたいに晴れ渡った日のことだった。

「おはよう」

「おはよう」

「おはよう」

雲一つない空、世間で言われるところの快晴の空の下、ブレザーを着た少年少女達が挨拶を交わし合っている。

日常的に見られる光景につい笑みを浮かべたくなる。

しかし、そんな何気ない日常は、時にして脆い。ある一つの出来事で容易く瓦解してしまう。

それは今この時間、この瞬間とて例外ではないのだ。

「きゃああああ！」

早朝だと言つにも関わらず、一人の女子生徒が黄色い悲鳴をあげる。

それは瞬く間に伝播していき、振り向いた女子生徒は次々と黄色い悲鳴をあげていった。

少女たちの視線の先には一人の男子生徒がいた。

容姿は一言で言えば超絶美形、漆黒の髪に海より深い青い瞳、身長は百八十を超えている・・・という、まるで少女漫画にでも出てきそうな少年だ。

しかし、性格の方はどうだろうかと言われると・・・そちらも非の打ち所が無いように思える。

実際、彼はその事を証明するかの如く、声をあげる少女達ににこやかな笑顔と挨拶の言葉を振り撒いている。

少女「はああああ・・・いつ見ても素敵よね、剣夜様は・・・」

少女「頭は良いし、運動神経も抜群だし・・・」

少女「そうよね！その上学園No.3ですもんね！」

少女達「はああああ・・・」

そんな事が少女達の間で囁かれているとは知らずに、剣夜様と呼ばれた少年は誰かの元へ歩み寄っていった。

時を同じくして、学校に向かう一人の少年がいた。

綺麗な顔立ちをしているのだろうが、牛乳瓶の底のように分厚い眼鏡をかけ、元は長く艶やかであったらう髪はボサボサになっており、後ろで一つのまとめられている。その為、お世辞にも格好いとは言えない。

少年が一人で歩いていると、後ろの方から女の子達のはしゃぎ声や歓声が聴こえてきた。

少年「なんだ・・・？騒々しいな」

少年はうざったらしそうに後ろを振り向いた。

すると、こちらに向かって来る一人の美少年の姿が目に入った。

その少年が一直線にこちらに来るのを確認して、この上なく嫌そうに溜め息を吐く。

少年「またお前か、剣夜・・・相変わらずの人気ぶりじゃないか・・・？」

嫌味を含んだその言葉に、全く意に介した様子を見せず、剣夜と呼ばれた少年は微笑み掛けてきた。

剣夜「相変わらずなのは君もだろう、悠姫？いい加減まともな身なりをしてきたらどうだい？今の君の姿は見てられないよ・・・昔の君はとても・・・」

剣夜が何か言いかけたが、その言葉を発するより速く、悠姫の拳が剣夜の横っ腹にめり込んだ。

悠姫「う、うるさい、このばか！」

悠姫と剣夜は家が隣通しだったこともあり、幼い頃からの付き合いだ。剣夜はよく悠姫の家を訪れ、悠姫の祖父に悠姫と一緒になっごかかれていた。

剣夜「くうう・・・いくら力の弱い君だからって、今は効いたよ・・・」

悠姫「力の弱いは余計だ！」

再び、悠姫の拳がめり込む。

この二人のやりとり、というか、主に剣夜が殴られる所を見ていた女の子達が悲鳴をあげる。

しかし、そんなことは全く意に介していないのか、蘇った剣夜は悠姫にひたすら話し掛けていた。

剣夜「そうそう、それよりいい加減、本気で僕と試合ってくれないか・・・？」

すると、これまでに以上にうざったそうな顔をする悠姫。

悠姫「またその話か・・・断ると前にも言ったはずだぞ。なんで学園No.3のお前とNo.121の俺が本気で闘り会わないといけないんだ・・・」

このランキングは何を表しているのかと言えば、それには彼らの通う学園が関係してくる。

彼らの通う私立御劔学園は通常のカリキュラムに加えて、特別な制度を持つことで有名だ。

その制度は武芸制度と呼ばれ、互いに武芸を競いあう制度のことだ。授業のない時間は全て闘う事が許されている。

武器は何を使ってもよく、チームを組んでもよい。要するに、何でもありということだ。

ただし、もちろん人殺しは禁止されているし、試合をしている者がやり過ぎないように監視者が常に目を光らせている。

そして、この闘いにおける強さを表しているのが、このランキングだ。

学園No.1は私立御劔学園において最強であることを示している。そして、No.1は自動的に生徒会長を任されることになっている。

また、このランキングが上位であればあるほど、学園からの支給がよくなる。

No.1ともなれば学費免除の上に学内の施設の優先的使用権が認められていたり、賞金が貰えたりと至れり尽くせりなのだ。

剣夜「そこを何とか・・・頼むよ。僕と君の仲じゃないか」

悠姫「どんな仲だ！絶対断る！」

はたから見ればたいへん奇妙な光景だろう。

かたや学園でもトップ3に入る実力者、もうかたや学園No.100にも入っていない落ちこぼれである。

誰が見ても可笑しな光景だ。

そうこう話しているうちに、学園が見えてきた。

私立御劔学園は古くから続く名門校で、その歴史は数百年続くとい

われている。この学園の特徴は、先程述べたように武芸制度である。健全な肉体には健全な精神が宿る、という精神のもと、この制度が作られた。

しかし、時代は動くもので、今となつてはこの制度が目当てでこの学園を受験する者が後を絶たない。

悠姫「ほら、学園が見えてきたぞ。この話はもう終りだ」

剣夜「ちよっ・・・まだ、話しは終わつて・・・」

もう話すことはないとはかりに、悠姫は校門をくぐつていった。

しかし、このとき悠姫はとことん運から見放されていた。

校門をくぐつたところで鼻先を何かが掠めていった。

瞬時に、周りの状況を把握しようとして神経を集中させる。どうやら校庭で武芸者同士が闘っているようだ。

そして今、自分を掠めて飛んでいったものが弓矢だったことを知った。

悠姫「まったく・・・あぶね〜な」

そう言つと、更に詳しい状況を把握しようとして神経を研ぎ澄ませた。

闘っているのは少女が二人と、少年が十人近くいる集団だ。

二人の少女を少年達に取り囲んで襲っていた。

少女達の方は明らかに劣勢で、もうほとんど負けが決まったようなものだ。

卑怯にも思える勝負だが、この学園ではそれが許されている。

いくら数が集まっても、圧倒的な強さの前には無意味だということだ。

それに本当に強い者は、そういうことはしないものだ。

悠姫「まったく・・・何やってんだか」

悠姫は関わる気はこれっぽっちも持っていなかった。

いや、悠姫だけではない。この場にいる全ての者が傍観を決め込んでいた。

ところが、襲われている少女達の顔に見覚えがあることに気づいた。

悠姫「あいつら、夕月に明月か・・・？」

通り過ぎようとしていた足が自然と止まる。

この二人はクラスメイトであり、他人と関わりを持つとしない悠姫に、未だに話し掛けてくる物好きな人物だ。

悠姫「まったく、何やってんだあの二人は・・・」

攻撃されているのがその二人である以上、もう見過ごすことはできない・・・

悠姫は頭を掻きながら、二人の方へ歩みを向けた。

次回予告

夕月と明月の元へと向かった悠姫・・・

圧倒的に不利な状況に悠姫はどう立ち向かうのか・・・

敵の刃が夕月と明月に降り下ろされそうになったとき、悠姫の剣が閃く・・・

次回、《垣間見る悠姫の実力》

第二幕 へ垣間見る悠姫の実力

夕月と明月は十人近くいる男子生徒に囲まれ、絶対絶命な状況だった。

四人が剣や槍といった近距離の武器で二人と交戦し、残りのメンバーのうち四人が各々の武器を構え逃げ道を封じている。

そして、更に残ったメンバーが弓を構えて、二人を射ようとしていた。

少年A「これだけの人数でかかれば、流石のNo.6とNo.7と言えども余裕だな」

リーダー格と思われる少年が厭らしい笑みを浮かべて二人を見据えていた。

明月「あ、んた達、か弱い女の子に、こんなことして、恥ずかしくないの？」

明月は自分の剣を杖代わりにして辛うじて立っでいられる状態だった。

全身ポロポロで、肩で息をしているような有り様だ。

夕月「本当に。卑怯もここに極まりですね」

夕月の方は明月まではとはいかないもののかかなり辛そうだ。

しかし、油断なく弓を構え、少年らが下手な動きを見せた瞬間、射ようとしているのは明白だった。

二人の言葉に嘲りの表情を浮かべる少年。

少年A「勝てばいいんだよ、勝てば！それに、俺らはルールに反しちゃいねえぜ。そんな台詞を吐く前にこの窮地を脱してみな、お二人さんよ！」

リーダーの少年が手を振りかざし、構えの合図を送った。
夕月と明月の表情が強ばる。

少年A「・・・放て！」

少年が手を降り下ろすと、夕月と明月を取り囲んで、弓を構えていた少年達が一斉に矢を放った。

その矢は的確に夕月と明月に向かってきていたが、今の二人にこれをかわすだけの体力は残されていなかった。

明月「万事休す、かな・・・」

夕月「そう、ですね・・・」

二人は既に諦めていた。夕月は構えていた弓を下ろしていたし、明月に至っては地面にへたりこんでいた。矢が目前まで迫り、もう駄目だと思われた刹那、一陣の風が吹き抜けた。

すると、十近く飛んできていた矢が全て地面に落下した。

明月「えっ、えっ・・・何が起きたの？ねえ、夕月・・・？」

夕月「いえ、私に聴かれても・・・」

何が起こったのかまるで分からない二人。

しかし、それは相手方も同じだった。少年達の驚きと慌てようは、夕月と明月のそれに比べて遥かに大きかった。完全に仕留められると思っていた攻撃が防がれたのだ。しかも、予期せぬ増援によって・・・

平静で居ろ、と言う方が無理な話だ。

少年「だ、誰だ！出てこい！」

悠姫「まったく・・・見てられないな。いくら七帝と言えど、女の子を集団で襲うのは同じ男として恥ずかしい限りだな」

七帝というのは学園の中で生徒会長を除く上位七名に入る実力者達のことである。七帝と呼ばれることはたいへん名誉なことではあるが、同時に他の生徒からは畏怖の対象とされる。因みに生徒会長は

天帝と呼ばれ、七帝とは別にたいへん畏れられている。しかし、どちらにも言えることは、敬称が生徒たちの畏れを招いているのであって、七帝自身が畏れられているわけではない。

悠姫が夕月と明月を庇う形で少年達と対峙すると、悠姫の風貌の異様に一瞬、訝しげな表情を浮かべる少年達。

しかし、それは一瞬のことで、すぐに自分達の邪魔をされたことを思い出し、怒りの形相を浮かべる。

少年「誰だ、お前は！」

だが、悠姫はこの少年のことなど眼中に無いのか、少年の言葉は無視し、夕月達の方を振り向く。

悠姫「夕月、明月大丈夫か？」

悠姫の登場に初めは驚いていた二人だったが、悠姫に話し掛けられる頃には正気に戻っていた。

だから、この場の危険性も十分に理解していた。

それ故に、悠姫が来てくれたことに対する安堵感よりも、悠姫の身が危ないという不安が先にたった。

明月「悠姫くん！？どうして来たの!？」

夕月「そうです！あなたの実力では……」

そのとき、痺れを切らしたのか、先程の少年が剣を構えて突進してきた。

少年「だから、誰だと聴いている!!」

悠姫はそちらを一瞥すると、いまいまして舌打ちをした。

悠姫「ちっ……うるさいな!」

少年が降り下ろしてきた剣を、身を回転させることで避け、そのまま勢いを殺さず腰にさげた剣帯から剣を抜刀する。

少年「なっ……!」

相手の少年はまさか避けられるとは思っていなかったのか、呆けているところにこの一太刀だ。

避けられるはずもなく、横腹にその一撃をくらい、地面へと倒れ伏した。

もちろん刃は潰してあるし、相手を傷つけないよう加工してあるため、ただ気絶しているだけだ。

悠姫はリーダーとおぼしき少年を倒せば、残ったやつらは逃げ出すと思っていた。

こういった烏合の集は弱いやつが集まりであるほど、リーダーが倒されたとき統制力を失い、逃げ出すものだ。

そう思つて一撃で少年を倒したのだろうが、残った連中は逃げ出すどころか悠姫に立ち向かってきた。

悠姫「逃げてくれれば楽なものを……」

悠姫は再び剣を鞘へと納めると、剣帯の位置を左側から右側へ移動させた。

夕月「えっ……まさか……」

明月「うそ……悠姫くんって左利きだったの!」 先程まで右手で剣を操っていたため、左利きだったという事実には驚く二人。

悠姫「は、やっぱりこっちの方が落ち着くな……」悠姫は左手を柄に添え、右足を後ろに下げて低めの前傾姿勢をとる。

悠姫「全部で……十、いや十二か」

敵の位置と数を把握すると、悠姫は左の軸足に体重を掛け地面を蹴った。

そこからはあつという間の出来事だった。
おそらく、やられた側の少年達は、自分達がどうやってやられたのか理解する間もなかっただろう。

悠姫は地面を蹴った後、近くまで来ていた三人の少年達に狙いをつけた。

一人を鞘に納めたままの剣で殴り飛ばし気絶させる。

そのまま身体を一回転させ、円心力を活かして抜刀する。この一撃をまともにくらった一人が呆気なく吹き飛ばされる。比喻表現ではなく実際に・・・

そして、その光景を見て恐怖で動けなくなっている三人目を、抜刀により振り抜いた剣を返し、袈裟懸けに斬り捨てる。

残った九人は何が起こったのか解らず、一様に呆けている。

悠姫がそんな隙を見逃す訳もなく、好機と見てさらに速度をあげる。片っ端から少年達を斬り捨てていき、遂に残り三人になったところで、少年達は逃げ出していった。

ここまでに掛かった時間、わずか十数秒・・・

既にあり得ないを通り越している状況に、残された二人の少女、夕月と明月の二人は自分達が狙われていた、という事実も忘れて呆けきっていた。

悠姫「おい、二人共・・・大丈夫か？」

闘いが終わり、悠姫が話しかけてきたにも関わらず、二人は未だ放心状態だった。

ピシッ・・・

その時、何かに亀裂が入るような音がした。

そして、牛乳瓶の底のようだった眼鏡が壊れた。

悠姫「あゝあ、やっぱり風圧に耐えられなかったか・・・結構気に入ってたんだけどなあ・・・」

先程の闘いで立回りで、悠姫の速さに眼鏡が耐えられなかったよ
うだ。

もともと度が入っていない伊達だったので、日常生活には支障はき
たさないが・・・

悠姫「あんまし素顔見られたくないんだよなあ・・・」

実は悠姫は中学まで眼鏡をしていなかったし、髪もちゃんとして
いた。

しかし、学校へ行く度さらされる女の子からの熱い視線と告白の嵐、
そして一部の男の子からの熱烈な告白・・・

悠姫「今思い出してもさむげが・・・特に後者・・・」

そのため、高校からは変装というかわざと野暮ったく見せて、それ
らから身を守っていた。

夕月「悠姫くん・・・なの？」

夕月は恐る恐るといった感じで悠姫に尋ねる。

悠姫「・・・？そうだけど・・・どうかしたのか？」

明月「うそ、悠姫くん！？すっごく綺麗・・・」

カラン、カラン、カラン、カラン・・・

悠姫「何を言ってるのか知らないが、予鈴のベルが鳴ってるぞ・・・」

この時、悠姫は二人の様子がおかしい事に気付いたが、始業時間が

迫っていたためとりとめて気にもせず、二人を急かして校舎の中へと入っていった。

この事が後々、災いとなって自らの身に降りかかってこようとはつゆとも知らず……

次回予告

悠姫の実力を知ってしまった夕月と明月……

そして、その素顔も……平和な学園生活を望んでいた筈なのに……

・
どうしてこんな事に……

次回、《巻き起こる狂乱の嵐》

悠姫「俺の平穩を返してくれ〜！」

第三幕 へ巻き起こる狂乱の嵐

カラン、カラン、カラン、カラン・・・

悠姫「ギリギリセーフ・・・」

始業のベルと同時に教室に駆け込む三つの人影。

もちろん、悠姫、夕月、明月の三人だ。

夕月「何とか間に合いましたね・・・」

明月「もうダメかと思った・・・」

三人とも校庭から全力で走ってきたというのに、息を切らしてないところは流石だ。

悠姫は先生が来ていないことを確認すると、自分の席へと向かった。

悠姫「（何かいつもより静かだな・・・）」

いつもより静かな教室に戸惑いを感じつつ、自分の席までやって来た悠姫。

悠姫が席に座ろうとしたところで異変は起きた。

一人の女子生徒が立ち上がって悠姫の所までやって来ると、突然悠姫の両肩を掴み、悠姫の顔を凝視してきたのだ。

女の子1「・・・まさかとは思うけど・・・朝霧君？」

半信半疑というか信じられないといった感じで聴いてくる少女に、呆れる悠姫。

悠姫「そうだけど・・・そんなの見れば分かるだろ？」

少女はブンブンと首を横に振ると、いそいそとポケットから鏡を出して悠姫に見せた・・・

今の自分の姿を・・・

悠姫「げっ・・・しまった！ゴムも切れてたのか！」

牛乳瓶の底のようだった眼鏡が壊れ、元々綺麗だった顔立ちが晒され、野暮ったく見せていた髪型もゴムが切れたことにより、ストリートに下ろされていた。

綺麗な男の子・・・というより女の子に近かった。

以前の悠姫と比較して、同一人物だと結びつける方が難しい。

女の子1「本当に、ほんと〜に朝霧君なの？」

悠姫「だから、そうだって言ってるだろ？」

さっきの少女がもう一度確認し、悠姫がそれを肯定したとき、それまで沈黙を保っていた・・・というか驚きで思考が停止していただけだろう・・・他のクラスメイトが騒ぎ始めた。

女の子2「え、うそっ、朝霧君!？」

男の子1「あれが、朝霧なのか!？」

女の子3「うわ・・・きれい・・・」

男の子3「信じられね〜」

男の子2「悠姫・・・お前、まさか女だったのか!」

皆、口々に勝手な事を言っているが、結局のところ言いたいことは同じなのだ。

『この綺麗なこが朝霧（君）だなんて信じられない』だ。

このクラスメイト達の言葉に悠姫はというと・・・
初めは啞然としていたものの、時が経つにつれて、その端正な顔に

青筋を浮かべて・・・

悠姫「て、テメエら〜!!」

悠姫は激しい怒りと共に、腰から剣を抜くと・・・

男子2「ちよつと、悠姫さん・・・いったい何を・・・」

女子1「朝霧君、早まつちゃダメだよ!!」

男子1「あ、朝霧・・・話せば、話せば解る・・・!!」

男子3「流石にそんなのでどつかれたら洒落にならんから・・・」

悠姫の異変に気付いたクラスメイトが冷や汗を流しながら説得にかか
る。

初めから、からかわなければいいのに・・・

悠姫は一度目を瞑ると、極上の笑顔を浮かべてこう言い放った。

悠姫「も〜ん〜ど〜う〜無用!!」

この日、担任の先生が教室に来たとき、教室は死屍累々だったとか

・・・
そして、先生は・・・

「鬼を・・・鬼を、見たんです」

・・・と、うわ言のように呟きながら、一週間の休暇を願い出たと
か・・・

それに比べて屍の方はというと、何れも安らかな笑みを浮かべて・・・

「て、天使の微笑みを見たんだ(よ)」

と囁いていたそうな・・・(めでたし、めでたし・・・)

・・・えっ？

もう終わりかって？

当然、まだまだ続くよ・・・屍の生産が、ね。

・・・by 悠姫

悠姫「・・・とかならないうちに、そのお喋りな口を閉じようか・・・
ね、みんな？」

悠姫が極上の笑顔（邪悪）でそう言うと、クラスメイト達はブルブル震えながら首を必死に縦に振るのだった。

悠姫「まったく・・・わかればいいんだよ、わかれば・・・」

悠姫はクラスメイト達が頷いたのを確認すると、ほっとし、気を緩めてしまった。

しかし、あと二人、注意しなければいけなかった人物が残っていたことを悠姫は忘れていた。

悠姫の背後に忍び寄る人影が二つ・・・

明月「ゆ・う・き・く〜ん・・・」

悠姫「ふえ・・・？なっ、ちよっ・・・うああ！」

いきなり後ろから飛び掛かれた悠姫は、当然予測など出来ず抱き締められてしまう。

そんな明月を見ていた夕月が顔を真っ赤に染めて・・・

夕月「明月、ダメでしょう・・・！」

悠姫「夕月・・・助けてく・・・」
明月をたしなめる夕月に一筋の希望を見出だした悠姫だったが・・・
夕月「私もいれてくれなくちゃ!」

と、言つて悠姫に抱きつく夕月。

二人の少女の顔はとても嬉しそうだ。

だが、一方の悠姫はと言うと・・・

悠姫「なっ・・・夕月まで・・・いい加減に・・・ふぁ・・・離れ
る・・・あう・・・てば!」

抱きつかれた二人にほほずりされたり、ほほずりされたり、ほほずり
されたり・・・

恥ずかしさのあまり、顔を真っ赤にして身もだえる悠姫に、クラス
の女の子達はと言うと・・・

女子達「(かつわいい〜!!)」

そして、男の子達は・・・

男子達「(俺は女の子が好きはずなんだ〜!!)」

・・・

あんたら・・・悠姫に殺されるぞ・・・

周りのクラスメイトの様子など気にもしていないのか、明月と夕月
の二人は未だ悠姫を抱き締めたままだ。明月「あぁ・・・もう、
可愛い過ぎだよ〜」

夕月「本当に・・・このままお持ち帰りしたいです〜」

悠姫「はう・・・誰が・・・ひゃわ・・・持ち帰られるか!いい加
減に・・・離れ・・・」

ガラガラガラ・・・

先生「あなた達、席に着きなさい。ホームルームを始め、る・・・

わよ？」

このクラスの担任である耶城沙耶香先生は教壇の所まで行き、振り返ったところで現実離れした光景を目にし、何も言えなくなってしまう。

名前、見た目共に若そうで、まあまあに美人な先生だ。

その上、質問にはちゃんと答えてくれるし、相談にもものってくれる。校内では男子、女子共にかんりの人気がある。

・・・と、まあ若くて人気のお姉さん、的な先生のように思えるが、実際は三十路過ぎのおばさ・・・

耶城「・・・誰か知らないけど、私の歳ばらしたら殺すわよ？」

!!!!!!

女の子「先生、どうかしたんですか？」

先生の目付きが一瞬、かなり危なくなっただので、一人の女生徒が訊ねた。

耶城はというと、先程の怖い顔が嘘のようににこやかな笑顔を浮かべてその女生徒を見た。

耶城「いいえ、何でもないわ・・・って言うか、いい加減にその三人、席に着きなさい！」

作者が危うく視線で射殺されそうになっていた間も悠姫はずっと抱き締められていた。

悠姫はもうされるがまま・・・というか抵抗する気力が残っていないのかぐったりしている。

夕月と明月は悠姫が抵抗しないのを良いことに、ほほずりしたり、髪の毛を触ったり好き放題している。

耶城「こゝらっ！水無瀬姉妹、いい加減に離れなさい・・・」

夕月「・・・はい」

明月「うううう・・・」

耶城先生の注意により、ようやく悠姫から離れる二人。

しかし、二人の様子は物足りなさそうというか名残惜しそうな感じ
で、もっと抱き締めていたいよう、と二人の目が物語っている。

耶城「朝霧君も席に座り・・・あらっ、変装はもういいの、朝霧君
？」

おや・・・？この先生は悠姫がわざとあんな格好をしていた事を知
っていたのか？

明月「耶城先生、知ってたんですか！？」

耶城の言葉にクラスのほとんどの者が驚きの声を挙げ、明月が皆が
思っていることを代弁する。

耶城「そんなの一目見ればわかるじゃない・・・？」

解るわけないですよ~~~~
皆の目がそう物語っている。

耶城「まあ、初めは基が良いのに、なんで野暮ったい格好をしてる
のかなあ・・・？って思ったぐらいだったけど、見ていればわかる
じゃない、わざとだって・・・」

見直しました、先生・・・！

生徒のこと、ちゃんと見てるんですね！

ただの三十路過ぎのおばさんじゃなか・・・

耶城「・・・一遍、死んでみる？」

すみません、ごめんなさい、失礼しました・・・!?
もう言いません、絶対に、きつと、必ず、口が裂けても・・・

耶城「それより、朝霧君大丈夫?目が死んでるけど・・・?」

何処か遠い所を見ている悠姫に声をかける耶城であったが、悠姫は
反応すらせず何かボソボソ囁いている。

悠姫「・・・女って怖い・・・女って怖い・・・女って怖い・・・」

そんな悠姫の様子を見て、ため息をつく耶城。

耶城「はあく、これは完全にトラウマってるわね・・・」

女の子4「ええく、そんなの困ります・・・」

明月「そうですね、悠姫君を抱き締められないじゃないですか!」

耶城「水無瀬妹、取り敢えず黙っていなさい・・・」

明月「うう~~~~」

戯れ言をほざいている明月はほっといて、どうしたもんかと思考を
凝らす耶城先生・・・

しかし、その時・・・

カラン、カラン、カラン・・・

一限目開始のベルが鳴った。

耶城「あら、もうこんな時間・・・じゃあ朝霧君の事は置いて、
授業を始めましょうか・・・」

男の子4「先生、いいんですか・・・?」

耶城「いいんじゃない・・・?そのうち、元に戻るでしょう・・・」

結局、貴女はどうでもいいですか・・・！

まあ、そんなこんなで悠姫の不運な一日が始まったのでした・・・

次回予告

死人と成り果てていた悠姫が復活し、滞りなく流れていく時間・・・
ふと気付けば、すでに放課後に・・・

夕月と明月にまわりつかれながらも帰途につく悠姫・・・
しかし、その背後には人影が・・・

次回、《忍び寄る影》

明月「しつこい男は嫌われるのよ・・・！」

第四幕 へ忍び寄る影

悠姫「はああああ〜」

教室の片隅、机にしなだれかかるようにして座っている（突っ伏している？）悠姫。

朝のホームルームの後、すぐに復活した悠姫であったが会った先生、会った先生が・・・

男性教諭「お、朝霧、えらく綺麗になったじゃないか・・・」

女性教諭「あら、朝霧君、すごく綺麗になったわね・・・ああ、お持ち帰りしたい・・・」

今、何か聞こえましたよ先生！ボソツと・・・！

男性教諭2「おおつ、可憐だ・・・！お前、本当に朝霧か！？」

先生・・・お願いですからそんな哀しそうな目で見ないで下さい、泣かないで下さい。

全てこんな感じだ。

挙げ句の果てにとどめがこれだ・・・

女性教諭2「あら、朝霧さん・・・女の子はちゃんと女の子用の制服を着ないと駄目じゃない・・・え、男の子？そんなことあるはずないでしょ・・・」

俺が疲れているのも分かるだろう？

まったく・・・先生にも呆れたもんだよ。

以上、悠姫の回想終了・・・

悠姫「もう、放課後か・・・時の流れだけが俺を癒してくれる・・・

「
何処か愁いを帯びた様子は可憐で儂げな雰囲気醸し出していて、見る者をはっとさせる。

実際、この場に残っている数人はそんな悠姫の様子に見とれ、動けないでいる。

しかし、この場の空気にさえ動じない人物が一人いた。

明月「ゆ・う・き・く・ん、一緒に帰ろうよ」

悠姫「うげっ、また厄介なのが来たよ・・・」

この、クラスでも一、二を争う美少女が今は悪魔にも思える。

夕月「悠姫君、明月のセリフをとる訳ではありませんが、良ければ一緒に帰りませんか・・・？」

明月の後ろに隠れていて見えなかったのか、いつの間にか明月の隣にいる夕月。

悠姫「ああ・・・いいよ」明月と夕月からのお誘いに渋々ながら頷く悠姫・・・

悠姫からすれば断る理由もないのに断るほど、この二人の事を嫌ってはいない・・・

悠姫「それじゃあ、とつと帰ろう・・・」

荷物を片付けて立ち上がるうとした悠姫の動きが不自然なところで止まる。

明月「悠姫君？・・・どうかしたの？」

不自然に動きを止めた悠姫に、明月が訝しげな表情を浮かべる。

悠姫「・・・」

明月「おゝい、悠姫く〜ん！」

聞こえているのか、聞こえていないのか、故意に無視しているのか・

悠姫は怖い顔をしたまま周囲の様子を窺っている。

そんな悠姫の様子に、遂に夕月が心配げに声をあげる。

夕月「悠姫君・・・」

悠姫「・・・いや・・・何でもない」

明月「ちよつと待ってよ！何でお姉ちゃんにはちゃんと答えてるの！？」

自分だけ無視されたことに不満な明月・・・

悠姫「うう〜ん・・・気分？」

ああ、また言わなくてもいいことを・・・

明月「むう〜」

あゝあゝ、膨れっ面でかわいい顔が台無しだよ・・・

悠姫「さあ、帰るよ・・・」

悠姫は改めて鞆を抱え直すと教室の扉の方へと向かった。

明月「あ、待ってよ、悠姫君・・・！」

夕月「もう、明月ったら・・・」

扉のところまで待っていた悠姫に追い付くと、三人仲良く？帰路に着くのであった・・・

家路についている途中、そろそろ高級住宅がちらほら見え始める辺りにさしかかった。

悠姫「・・・おい、どこまでついてくる気だ」

この辺まで来ると住宅の数は一気に減る。

そこそこな大きさの家が等感覚で並んでおり、見た目美しい。

建物の造りもシックなものがほとんどで、そのことがこの辺りの美しさを更に引き立てている。

もちろん、この二人の住んでいるところは知らないが、この辺に水無瀬なんて言う家は無かったはずだ。

すると、明月はにっこりと微笑んだ・・・それはもう天使の微笑みと勘違いしてしまうくらいにっこりと・・・

明月「そんなの悠姫君の家までに決まってるじゃない・・・」

悠姫は心底うんざりした顔で夕月の方を見た・・・

一樓の希望を信じて・・・

夕月「あ、私の都合なら大丈夫ですよ・・・」

何を勘違いしたのか的外れな返答を返す夕月。

一度言い出したらきかない明月に、何故か朝霧家への家庭訪問が楽しみなご様子の夕月。

どうやら、悠姫の退路は断たれたようだ。

仕方なく我が家まで案内することになった悠姫・・・

悠姫「(まあ、このまま何事もないなら、それくらいかまわないか・・・)」

教室で不穏な空気とでも言うか、誰かに睨まれているような気がして以来、ここに到るまで常に気を巡らしていた悠姫であったが、場

所が場所だけでもう襲って来ないだろうと気を抜いてしまったのだが……

そうは問屋が卸さないようだ……

突然、空気の密度……匂いとも言えれば分かりやすいか……が変わったかと思うと、三人を取り囲むようにして現れる男達。

その数は十数人だろうか……皆、手に各々の武器を握り油断なく構えている。

見たことのない顔ばかりだが一つ言えることは皆、御劔学園の生徒だということだ。

その証拠に自分達と同じ制服を着用している。

悠姫「まあ、何事もなく済むはず無いよな……」

悠姫が嘆息していると急に人波が割れ、リーダーと思われる一人の男が前に出てきた。

達也「俺の名前は日野達也。朝、お前らに伸された日野和也の兄だ……」

律儀にも名を名乗る相手……

それにしても日野達也に日野和也……

日野……達也……

悠姫「日野……そうか、No.5、七帝の日野達也か!……でもなんでそんな奴が俺に挑む?それに和也って誰だ?そんな奴倒した覚えはないけど……」

達也は悠姫に憤りを見せるわけでもなく、静かに悠姫を見据えていた。

達也「今朝、お前らにやられたグループのリーダーだよ・・・まあ、一瞬でやられたみたいだから覚えて無くても仕方ないか・・・」悠姫と達也が静かに会話している様子を見て、はらはらしている明月。夕月はその隣で静かに様子を窺っていた。

悠姫「ああ、あいつか・・・いや、あまりに似てないから分からなかった・・・」

悠姫の言葉に笑みを浮かべる達也・・・

達也「よく言われる・・・実に似てない兄弟だなんてな」

達也が微笑んだことでこの場の空気が柔いだ。

明月がこのまま行けば、争わなくて済むかも、と思っただくらいだ・・・

しかし、世の中そんなに上手くいく筈ないのだ・・・

達也「だが、どんなに似てなくても、不出来でも、あれは俺の弟なんだ・・・その落とし前だけはつけさせてもらう！」

一瞬にして場の空気が張りつめたものへと変わった。

達也はその手に紅に染まる槍を握る。

達也「紅蓮槍騎の達也いくぞ！」

七帝にはそれぞれ使用している武器に応じた異名が与えられている。

達也は深紅に染まる槍を使うため紅蓮槍騎とよばれている。

槍を片手に突進してくる達也に悠姫は盛大なため息をついて、自身も応戦の体勢をとった。

悠姫「まったく・・・今日は人生で一番ついてないんじゃないか・・・？」

達也は一息に悠姫に肉薄したかと思うと槍を放り下ろした。

悠姫はそれをバックステップすることで回避する。

しかし・・・

達也「あまい・・・！」

達也は降り下ろした槍を、体ごと回転させることにより、遠心力をのせた上で強力ななぎはらいを繰り出してきた。

悠姫「ちっ・・・」

迫り来る刃に姿勢を低くし、抜刀する。

刃と刃が交錯し互いに弾かれる二人・・・

悠姫「流石は七帝・・・今には、一瞬ヒヤツとしたよ・・・」

言葉とは裏腹に、そんな様子をあくびにも出さない悠姫。

対して達也は何処までも真剣だった。

あの一撃を、ああまで容易く防いだのだ・・・まぐれで通せるものではない。

ましてや、悠姫はN O . 1 2 1 . . . まぐれや偶然で防げる程、このランクの差は甘くはない。

達也「・・・お前、何者だ。まさか、あの一撃を防いでおいて、まだ格下だとかか言うんじゃないだろうな・・・」

悠姫「さあね、どうでもいいだろ。そんなこと・・・」

悠姫の言葉に何を感じたのか、達也は頷き微かな微笑さへ浮かべた。達也「そうだったな・・・俺らの闘いにランクなんて関係なかったな・・・いや、私情関係なしにお前と闘いたくなかった」

達也の態度、性格を知って嘆息する悠姫・・・

悠姫「何でお前みたいなやつが、あいつと兄弟なんだよ・・・」

いつしか二人は真剣な表情で互いを見つめ、契機を窺っていた・・・

次回予告

静かなにらみ合いがいくら続いただろう・・・
数分、数十分・・・それとも、わずか数秒だったのだろうか・・・
永い沈黙の果てに、悠姫の剣と達也の槍が交わる・・・

次回、《魅せる剣》

達也「何故、俺の攻撃が通らない・・・」

夕月「綺麗・・・まるで舞っているみたい・・・」

第五幕 　　《魅せる剣》

静かなにらみ合いが続き、いったいどれくらいの時間が過ぎたことだろう……

見ているものには何時間にも感じられる時間……

しかし、実際に闘っている二人には、わずか数分にも満たない短い時間であつただろう……

何も見えない……

何も聴こえない……

何も話さない……

二人は、ただお互いの存在だけを認め、静かに見つめ合う……

しかし、その均衡がいつまでも続くはずはない……

達也「はああああ……！」

達也は姿勢を低くすると、凄まじい速さで突進していく。

槍というものは、本来斬りよりも突きに特化している。

逆に、剣は斬りには向いているが、突きはどうしても槍に劣る。

達也はその利点を活かして、悠姫を攻めてきた。

悠姫「くっ……」

一息で詰め寄られるような感覚に戸惑う悠姫だったが、横に跳ぶことでそれをかわす。

しかし、悠姫が反撃の体勢をとる前に次の攻撃が来る。

突いた槍を引くこともなく横に薙ぎ払う。

悠姫はそれを剣で受け止めると、そのまま勢いに委せて押し返す。

達也「ちっ……」

少し体勢を崩した達也、悠姫はそこをついて反撃する。

悠姫「てやあああ……！」

右上からの切り下ろし、それを柄で受け止める達也……しばらくその切り結びが続き、両者一步も退かない……

その様子をハラハラしながら見守る夕月と明月……

夕月「悠姫君が闘っているのに何もできないなんて……」

悠姫の為に何かしたいと思いつつも、達也の仲間たちに囲まれ、動きを封じられている……

自身の無力さに歯噛みする夕月……

「大丈夫だよ、水無瀬さん……」

そこに聴こえてくる男性の声……

その声の主は……

明月「剣夜君……！」

なんとそこに現れたのは、剣夜様こと華菱剣夜だった。

剣夜「大丈夫だよ、悠姫は負けない・・・彼の实力はこんなものじゃないからね・・・」

夕月・明月「え・・・」

先程までは取り乱していた二人だったが、剣夜の言葉を聴いたことで少し落ち着きを取り戻していた。

すると、冷静になることで初めて見えてくることもある。

明月「あっ・・・」

夕月「まさか・・・」

切り結びが続く中で、達也は言い知れぬ違和感を感じていた。

達也「（・・・なんだ、この違和感は・・・）」

一度抱いた違和感は消えることなく、達也の中で膨れあがっていった・・・

達也「・・・お前、何か隠してるだろ？」

達也の言葉に少し驚きの表情を浮かべる悠姫・・・

悠姫「へえ、どうしてそう思う・・・？」

楽しげな表情を浮かべる悠姫・・・

それに対して、達也はどこまでも真剣な表情で悠姫を見ていた。

達也「何か、闘い方に違和感があるんだよ・・・そう、様子を見るような・・・」

悠姫はその言葉に、ついに笑みを溢した。

悠姫「やっぱり、あんたがあいつと兄弟なんて信じられないよ……」

悠姫は刃を返し達也の太刀筋を反らすと、バックステップして距離をとった。

悠姫「いいよ、本気見せてあげる……」

悠姫は剣を収納すると剣帯の位置をずらし、鞘の位置を左から右へと移動させた。

そう……左手で抜刀しやすいように……

悠姫「ここからが本番だよ……」

悠姫は一気に加速すると達也との間合いを詰め、抜刀する。

速い……それは先程までとは比較にならない速さだった。

それに対し柄で受け止める達也……

今度も切り結びが続くのかと思われたが、二人とも即座に離れ構えをとる。

互いが互いをにらみ合い、隙を窺っている。

達人の勝敗が一瞬の隙で決するように、二人の闘いも先に隙を生んだ方が負けるだろう。

先に動いたのは達也だった……

開いた間合いを詰め、突きを繰り出してくる。

悠姫はそれを剣で捌くが……

達也「まだまだ……!」

達也は一突きでやめることなく、連続で繰り出してきた。

高速で繰り出されるその突きは、まるで何本、何十本という槍が一気に襲いかかってくるような錯覚を与える。

それは相手にどれだけの威圧感を与えることだろう・・・

悠姫は向かってくる槍を冷静に見つめ、その手に持つ剣で捌いていく。

幾度となく繰り出した突きを全て防がれ、突きの中に斬りと薙ぎ払いを混ぜる達也であったが、それもあまり意味をなさなかった・・・

この闘いにおいておかしな点があることに気付いただろうか・・・？

何かがおかしい、何かがひつつかかる・・・

最初にそれに気付いたのは達也だった。

悠姫に攻撃させる暇を与えないように攻撃してくる達也・・・

圧倒的有利な立場にいる彼がどうして・・・

いや、そうした立場にいた彼だからこそ気付いたのかもしれない・・・

数多となく繰り出してきた攻撃が、全て通っていないということに・・・

いや、この言葉も正しくはないか・・・

彼は気づいたのだ・・・

悠姫が自分の太刀筋を全てずらしていることに・・・

最小限の動きだけで、達也の突き、斬撃の軌道をずらし、当たらなくしているのだ。

それは、攻撃している側にとっては、ある意味恐怖を覚えることだろう……

防がれている感覚がないのだ……まるで実体なき実体を攻撃している気分だろう……

しかし、見ている側にとっては……

明月「うっわ〜きれい……」

夕月「舞っているみたい……」

流れるように動く悠姫の動作は舞っているようにも見え、剣を片手に携えるその様子は、あたかも剣舞をしているかのように見える。

剣夜「……悠姫の剣はね魅せる剣なんだよ。最小限の動きだけで、相手の攻撃を受け流す……夕月さんが言ったようにまるで舞っているみたいだろう……？それともうひとつ……」

夕月と明月は、剣夜の言葉など耳に入っていないのか、悠姫に視線を注いでいる。

しかし、そんな美しい舞も長くは続かない……

片や全力に近い高速での連続突き……

片や最小限の動きだけでの守り……

こんなことを続けていけばどうなるか、そんなこと誰の目にも明らかだ……

達也「くっ……」

ついに息が切れたのか、悠姫から離れる達也……

達也「ハア・・・ハア・・・」

大きく息を吐く達也・・・

すでに肩で息をしている状態で、息を切らしていることが誰の目にも分かる。

悠姫「いい加減に諦めたらどうだ・・・？もう、立っているのもやつとなんだろう？」

達也「・・・こ、とわる・・・俺は・・・まだ、闘える・・・」

息も絶え絶えの様子 of 達也・・・

しかし、戦意だけはまだ衰えていない。

槍を構え、いままでにないくらい低い体勢をとる達也・・・

次で勝敗を決めようとしているのは明らかだ。

そんな達也の様子に真摯に応える悠姫。

剣を鞘に納め、抜刀の構えをとる。

互いににらみ合う二人・・・

その様子を固唾を呑み込んで見守る夕月と明月・・・

そして一人、楽しげに見ている剣夜・・・

今、悠姫と達也の闘いに決着が着こうとしていた・・・

悠姫と達也・・・二人同時にして地を蹴り、加速する・・・

達也「はああああ……」

悠姫「てやあああ……」

達也は低い姿勢から速さを殺さずに、一撃必殺の威力を乗せた突きを繰り出してきた……

それは、幾ら傷付かないようにに加工してあるとは言え、当たればただで済むようなものではなかった。

未熟な者であればこの突きを前にしたとき、立っているのでやっただろう……

悠姫はその軌道を見破り、上体を反らすことで回避した……

魅せる剣……悠姫の剣とは相手の太刀筋を捉え、その軌道を少しずらすことによって最小限の動きだけでの回避を可能にしている。つまり、相手の太刀筋を見ることが予測する事に長けていなければ成り立たないのだ。

そんな悠姫だからこそ成し得た芸当だと言えよう……

悠姫はそのまま達也の懐に潜り込み、速さを殺すことなく抜刀した。

達也「うぐう……」

それは確実に達也を捉え、一撃の元に撃沈させた……

剣夜「勝負あつたな……最小限の動きだけで相手の攻撃をいなし、相手が疲れたところで得意の抜刀術で決める。……それが悠姫の

剣なんだよ」

明月「へえ……悠姫君すごいんだ」

剣夜の解説に素直に驚く明月……

しかし、納得がいかない人物が一人……

夕月「でも、あんなに強いのに何故ランクが低いんですか……？」

それに日野達也を倒せるぐらいの実力なら七帝入りをしていてもおかしくはないのに……」

悠姫の強さとランクの関係に疑問をもつ夕月……

それに対して、剣夜は嘆息をもらし心の底から残念そうに告げた……

剣夜「つまらないんだって……」

夕月「はい……？」

明月「はあ……？」

剣夜が告げた言葉がいまいち理解出来なかった様子の二人……

それはそうだろう……

武芸制度という制度のなかに強さの向上を求めてやって来た二人には意味は分かっても納得はいかないのだろう。

剣夜「そうだよね……その反応は正しいと思うよ。悠姫はね、強さに関心がないんだよ……だから、武芸制度にも興味はないんだ」

夕月「つまり、上位ランクを目指す気はないと・・・？」

剣夜「そういうこと・・・本当は僕も本気で闘いたいんだけど、受けてくれないんだよね・・・」

剣夜はもう一度嘆息すると、悠姫の元へと歩いていった。

悠姫「大丈夫か・・・」

達也の元へと駆け寄った悠姫・・・

心配気に達也に問い掛けると・・・

達也「何とかな・・・」

負けたというのに悔しそうな顔一つ見せず、むしろ清々しささへ感じる表情で横たわる達也・・・

その様子に安堵する悠姫・・・

もしかすると、死力を尽くした闘いのなかで友情が芽生えたのかも
しれない・・・

しかし、貴方は知っているだろうか・・・？

友情とは芽生えるは難く、壊すは易いということを・・・

例えばそう、一つの失言で容易く喧嘩してしまったり・・・

達也「しかし、まさか俺が女にやられるとはな・・・」

達也の言葉を聞いた途端、悠姫の表情が固まる・・・

・・・

・・・

・・・

悠姫「・・・いま、何て言ったの？」

一瞬固まったのが嘘のような、極上の笑顔で聞き直す悠姫・・・

達也「だから、まさか俺が女にやられるとはな・・・って言ったんだよ」

この時、達也は間近で見る悠姫の笑顔に目を奪われ、拳が振り上げられたことにきづかなかった・・・

悠姫「お〜れ〜は〜、お・と・こ・だ〜〜〜！！」

そして、拳は降り下ろされる・・・

次回予告

達也との闘いに決着が着き、一同は悠姫の家に向かう・・・
そこに何故か同行してくる達也・・・

悠姫の家に到着したはいいが、その大きさに啞然とする一同・・・
そして、出迎えてくれる人物が一人・・・
それは悠姫の唯一の・・・

次回、《悠姫の家族》

雅「お帰りなさい、悠姫・・・」

悠姫「ただいま、雅・・・」

第六幕 悠姫の家族

高級住宅街をひたすら歩く四人と一つの骸・・・

大勢いた達也の手下達には丁重にお帰り願ひ、いまは達也と剣夜を含む五人で悠姫の家へと向かっていたのだが・・・

悠姫「何でそんな奴連れていくんだよ・・・！放っていきやいだろ！」

自分を女呼ばわりされたことに怒っている悠姫は、達也を連れていくことにどうしても納得できないようだ。

剣夜「仕方ないだろ・・・あのまま寝かせとくわけにもいかないし。それ・に、原因を作ったのはキミだろう、悠姫？」

悠姫「うう・・・っ。で、でもっ、そいつの手下どもに任せとけばよかつたんじゃないか・・・？」

剣夜「その手下達に剣をちらつかせながら、丁重にお帰り願ったのは・・・ど・こ・の・誰だったかな？」

悠姫「ううゝ、だってそれは・・・」

剣夜「・・・それは？」

悠姫「何でもないです・・・」

剣夜の剣幕に押され何も言えなくなってしまう悠姫・・・

そのとき・・・

達也「うっ・・・うっ・・・」

意識が戻る達也。

しかし、目が覚めたはいいが見知らぬ光景に戸惑いを覚えているようだ・・・

達也「ここは・・・？それに俺はなぜ意識を・・・」夕月「それはですね・・・角角鹿鹿で・・・」

明月「・・・丸々馬馬・・・なんだよ」
達也「そうか・・・」

分からないことだらけで戸惑う達也ではあったが、夕月や明月による説明のお陰で悠姫の家に向かっていることはわかったようだ。(いいのかなあ、こんな説明で・・・汗)・・・っていうか、明らかに間違ってるでしょ、お二人さん・・・特に明月さん、そんな言葉あるんですか・・・)

《注》正しくは、斯く斯く然々です。まるまるうまうまという言葉は辞書では引つ掛からなかったので、おそらく無いのでは・・・？

ここまでは、まあ当然と言えば当然の反応だった。

状況を理解できていない者が初めに取る行動と言えよう・・・

しかし、達也はここでもまた一つの失態を犯すのだった。

それは彼にとってはある意味、一世一代の大勝負だったのかもしれない

ない・・・

しかし、それは悠姫のそのナイーブな心を傷付けるに十分の行動だったと言えよう・・・

そう、彼がとつた行動とは・・・

達也「朝霧悠姫・・・俺は、君に惚れた！俺と付き合ってくれ！」
なんともはや、愛の告白とは・・・

悠姫を強く抱きしめ、自らの気持ちを叫ぶ達也・・・

悠姫「ふ・・・え・・・？」

悠姫は突然の事に頭がついていかず、呆然としたまま固まっていた。

しかし、それがいけなかったのかも知れない・・・

抵抗しない悠姫に、何を勘違いしたのか・・・おそらくオツケーだとも思っただろうが・・・あるうことかその悠姫に段々顔を近づけていき、なんと・・・！

夕月「だ、ダメー！！！！」

達也の行動が何を示しているのか、いち早く気付いた夕月が悲痛な叫びを挙げる。

止めにはいるうと駆け出した夕月だったが、今一歩間に合わなかった・・・

そう、悠姫の唇と達也の唇が・・・

悠姫「ううつ・・・！！！！！！」

重なった・・・

その光景を見ていた明月も愕然とした表情を浮かべる・・・

明月「うそお・・・」

剣夜も驚きのあまり身動きが取れないでいるようだ・・・

悠姫とて最初は驚きで動けないでいたが、状況を理解するにつれてその綺麗な顔を真つ赤に染めて、達也を突き放そうと試みるが、如何せんギツチリと抱き締められているため、そう簡単には離れてくれない。

一向に離れようとしなない達也に、遂に悠姫のなかで何かが弾けた。

悠姫「ううふへんに・・・ははへふはへ！（いい加減に・・・離れやがれ！）」

言葉にならない声を上げて、達也の股間を思いつき蹴りあげる。

達也「！！！！！！？？？？？」

達也は声にならない悲鳴を上げて蹲る。

男ならば当然の反応と言えよう・・・

剣夜「うわ~~~~、それはかわいそうだよ、悠姫・・・」

軽く非難する剣夜に対して、声を荒げる悠姫・・・

悠姫「知るか、こんな奴！もう一回蹴つとけばよかった！」

幾ら、蹴られても仕方ない事をしたとはいえ、同じ男として同情を

禁じえない剣夜なのであった・・・

そんなこんなで、ようやく悠姫の家に着いたまではよかったのだが・

明月「お、大きい・・・」

夕月「これは・・・家と言えるんですか・・・」

悠姫の家に着いた一同は、まずその大きさに驚かされた。

何せ建物だけでも普通の家の5倍以上はあり、敷地も合わせると、それはもうとても家と呼べる代物ではなかった・・・

悠姫「なに呆けてるんだよ・・・放っていくぞ」

剣夜「うわ・・・待つてくれたっていいじゃないか・・・」

一人そそくさと家に入ろうとする悠姫を、慌てて追い掛ける三人。

「お帰りなさい、悠姫」

一人の少女が玄関で出迎えてくれる・・・

一見したところ年齢は悠姫達と同じくらいだろう。

腰まである黒く艶やかな髪と優しげな眼差しが印象的な、たいへん美しい少女だ。

悠姫「ああ・・・ただいま、雅」

剣夜「こんにちは、雅さん」

出迎えてくれた雅に応える悠姫と挨拶する剣夜。

明月「うっわっ、綺麗な人・・・」

夕月「うん・・・」

夕月と明月の二人は雅の美しさに見惚れて挨拶も忘れていたようだ。
・
・

その様子に呆れた剣夜が、二人を窘める。

剣夜「ここら二人とも・・・その気持ちは分かるけど、ちゃんと挨拶しないと・・・」

剣夜に言われて、自分の失礼な振る舞いに気付いた夕月があわてて挨拶する。

夕月「す、すみません・・・私は水無瀬夕月といいます」

明月「あうう、水無瀬明月です・・・」

夕月に続いて明月も挨拶するが、二人とも恥ずかしさのあまり顔を真っ赤に染めている。

そんな二人を見て笑顔で返す雅。

雅「気にしないで下さい。私は玖瀬 雅といいます」淑やかに微笑む様子に、二度見とれる二人。

そんな二人はさておき、さつさと家の中に入っていく悠姫と剣夜。

明月「はわわわ、ちょっと待ってよ二人とも・・・」

それを見て、急いで追い掛ける夕月と明月。

そして、みんなが家の中に入った事を確認して、雅が門を閉めて入ってくる。

剣夜「・・・あれっ？何か忘れているような・・・まあ、いいっか？」

道端に蹲る少年が一人・・・

達也「みんな……俺の事を……忘れるな……」
未だ蹴られた痛みで立ち上がれないでいる達也は一人、道端に放つて置かれていた。

その姿からは、悠姫と刃を交えていたときの雰囲気は微塵も感じられない……

只々、情けなさだけが漂っていた。

……

さて気を取り直して、達也も加わった5人はリビングに移動する。雅「丁度よかったです。先程、ケーキが焼けたところでしたので、まずお茶にしましょうか」

そう言っつて、雅はキッチンの方へと消えていった。

すると、それを待つてましたと言わんばかりに、明月が悠姫に問い掛ける。

明月「……すっごく気になってたんだけど……雅さんって悠姫君のなんなの？苗字が違うから姉妹とかきょうだいじゃあ無いでしょう……それに、あの雰囲気じゃあ、ただのお手伝いさんってわけでも無さそうだし……」

そう言われて悠姫は少しの間、考える素振りをしていた。

悠姫「そうだな……まあ、お前たちなら心配いらないか……でも、今度そのイントネーションできょうだい、って言ったら三日は足腰立てなくするよ……」

悠姫は一度、頷くと語り始めた。

側では、明月がブルブル震えているのだった・・・
初めから言わなければいいのに・・・

悠姫「雅はな、俺が小さかった頃、うちの親が拾ってきた子だ・・・

」

明月「いきなり、そんな重たい話!？」

明月が突然、大声を挙げたが・・・

悠姫「近くの境内に捨てられていたのを、『私たち、本当は女の子
がほしかったのよね』とかいう理由でな・・・」

何事もなかったの如くスルー・・・

それはそれでひどいだろ、悠姫くん・・・

悠姫「でもまあ、物心ついた頃から一緒にいるしな、俺にとっては

唯一残された大事な家族だよ」

悠姫が話を終えると、そのタイミングを見計らっていたかのように、
雅がケーキとティーセットを運んでくる。

雅は何事も無かったのように皆に微笑みかけた。

雅「・・・お話は終わりましたか？」

すると、悠姫もこれまた何事も無かったのように答える。

悠姫「ああ、ちょうど今、終わったところだよ」

雅「では、お茶にしましょうか」

こうして、朝霧家訪問はお茶会へと名目を変え、何事もなく平穩に
過ぎ去って行くのだった・・・

これが、平穩の終わりになるとは知らず・・・

これからが悠姫にとっての苦難の始まりなのであった。

――お茶会の後の一時の出来事――

明月「では、毎年恒例、お茶会の後の王様ゲーム、第一回目を開催したいと思います！」

パチパチパチ・・・

悠姫を除く皆が拍手を贈る。

剣夜「一回目なのに恒例つてところやお茶会の後になんで王様ゲームつてところとか、いろいろ意味の分かんないところはあるけど、面白そうだからいいや〜！」

いろいろと的確なツッコミをありがとう・・・
なんだかもう、作者としては言いたいことが一杯だけど・・・面白そうだからいいや〜

しかし一人、納得のいかない人物が・・・
悠姫「なんで、俺がそんなことしなきゃならないんだ！！やりたいなら自分達で勝手にやれ！」

でも、そんな悠姫の言葉も、今の明月にとってはどこ吹く風・・・

明月「では、まずトップバッター悠姫君、どうぞ！」

引く気は無かったものの目の前に出され、ついついくじを引いてしまふ悠姫・・・

剣夜達も続々とくじを引いていく。

明月「いつくよ、王様だ〜れだ！」

すーっと手を挙げたのは、なんと雅だった。

雅「私です・・・」

明月「じゃあ、命令言ってみよ〜」

ノリノリの明月に皆が苦笑する。

雅「そうですね・・・では、お約束で一番と四番がキスをするということで」

さてさて、ここで一番と四番を引いたのは・・・

悠姫「ちょ、ちょっと待て！いくら何でもそれは・・・！」

夕月「そうです！そんなの不純です！」

明月「ふむふむ、なるほど・・・当たりを引いたのは悠姫君と夕月だね！」

自ら墓穴を掘るかね普通・・・まあ、どちらにせよ時間の問題だっ

たがね・・・

悠姫「ううっ・・・」

夕月「はうっ・・・」

明月「よし、じゃあキスいってみよう！」

と言われてところで、出来ないのが普通だろう・・・

明月「早くやってよし！それ、キース、キース、キース・・・」

いつまで経っても動こうとしない二人を見て、明月がキスコールを始めた。

夕月「明月、いい加減にしないと怒りますよ！」

勢いよく立ち上がった夕月。

しかし・・・

夕月「えっ、えっ・・・はわわわわっ」

勢いをつけすぎた余りに、すってんころり・・・

もう気付いた方も多いでしょう・・・

そう、倒れた先には・・・

悠姫「ううっっ」

もの見事に悠姫君の唇を奪った夕月ちゃんなのでした・・・

次回予告

長い長い一日がようやく終わりました。

明日からは、また平穏な日々が・・・と期待する悠姫君なのですが、そうは問屋がおろしません。

そう、悠姫君を襲う苦難の日々はここから始まるのです・・・

次回、《新たな同居人！？》

悠姫「いい加減に・・・出ていけ～～～～」

間幕 へキャラ紹介

六花：とりあえず、物語が一段落着いた（一日が終わった）ので、登場するキャラクターを紹介したいと思いまーす。

司会は私、作者こと六花と・・・

明月：キャラクター人気投票、堂々一位（自称）！！！！の明月ちゃんを務めさせて頂きます！

六花：今回はこれまでの話に出てきたキャラクターのなかでも、今後も物語に関わってくるキャラクターを重点的に紹介します。
では、早速ですが一人目・・・

明月：そう言えば、この物語って・・・

六花：いきなり話の腰を折るの！？

明月：まあまあ・・・それで、この物語って学園バトルアクション
+ コメディーって感じで構成されてるよね？

六花：一応、そのつもりだけど・・・？

明月：見てて思ったんだけど・・・この話って、某出版社から出されてる『はて×ブードに・・・』

六花：うわぁ~~~~、うわぁ~~~~、うわぁ~~~~、言っちゃダメ~~~~、ダメだから~~~~！

ハア、ハア、ハア・・・

明月：いや、設定的には鋼のレギ・・・

六花：だから、言っちゃダメだから~~~~~!!!!!!

明月：ふ~~~~ん・・・まあ、いいや。じゃあ、早速キャラクター紹介一人目いってみよ

六花：（こ、こいつ~~~~~・・・!!!!）

明月：一人目はもちろん、この人。この物語の主人公にしてヒロイン（笑）、朝霧悠姫君です。

六花：（はあ~~~~、もうどうでもいいよ・・・）
悠姫のプロフィールは、確か・・・
身長173cm、体重56kg、年齢は15歳（高1）、誕生日は11月22日、学内ランクにおける順位No.121
・・・だったかな。

明月：へえ~~~~、悠姫君って意外に背が高いんだ
六花：そうなんですよね。

さらに、腰まである茶色みがかった艶やかな黒い髪とアメジストのような紫の瞳の切れ長の目が相まって、まるで男装の麗人を思わせるんだよね！（本人の前で言ったら殺されるけどね・・・）

明月：今、思い出しても、うつとり~~~~・・・

六花：おーい、明月さ〜ん。すっかり~~~~。

よだれ出てるよ・・・

明月：……はっ！私としたことが、ついつい妄想に入ってしまった……

六花：明月さん、口調が変ですよ……

明月：はう……え……と、コホン……
じゃあ、次の人行ってみよう！

六花：（こ、こいつ、いま明らかに話題変えたなあ……）

明月：二人目はもちろん、この物語の正ヒロインこと、このわた……

六花：二人目は、主人公である悠姫の親友にして幼なじみ、そしてライバルでもある華菱剣夜君です！

明月：（こ、このアマア……）

六花：どうかしたの、明月さん……？そんな怖い顔して……

明月：な、なんでもありませんよ、なんでも……

（いつか痛い目にあわせてやるう……）

それより、剣夜君と言えば180を超える身長と漆黒のような髪に海より深い蒼の瞳が特徴的だったよね

六花：そうだね。

剣夜のプロフィールをまとめると……

身長は184cm、体重は71kg、年齢は16歳（高1）、誕生

日は6月14日、学内ランクにおける順位はNo.3（異名：蒼天
劍騎）

・・・こんな感じです。

明月：背が高く、かつこよくて、おまけに強くて・・・ああ、もう言うことなしだよね！

彼と目が合えば、大抵の女の子はコロリだよね！夢見心地だよね！

六花：（・・・コロリ？夢見心地？・・・
まさか、邪眼？ジャスト3分？）

明月：・・・今、なにかバカなこと考えてたでしょ・・・まあ、いけど。

それより剣夜君って、あの見た目であの強さなのに、これまで存在感が希薄だったよね・・・可哀想じゃない？

六花：まあ、まだ物語も序盤だからね、これからだよ・・・たぶん。

明月：ふ〜ん・・・まあ、いいつか。

じゃあ、次いつてみよう！

六花：お〜〜〜！

次は本作におけるヒロインのこの二人、水無瀬夕月と明月のツインズです。

先ずは、姉である水無瀬夕月から。

明月：ええ〜〜〜

私からいつてよう〜〜〜！

六花：順番、順番。

夕月のプロフィールはこんな感じ・・・

身長158cm、体重42kg、年齢16歳（高1）、生年月日は7月21日、学内ランクNo.6（異名：白夜弓姫）
続いて、明月のプロフィールはこんな感じ・・・

身長158cm、体重42kg、年齢16歳（高1）、生年月日は7月21日、学内ランクNo.7（異名：黒天刀姫）

明月：なんだか違うのランクと異名だけなんだけど・・・手抜き？

六花：そんな訳ないじゃん・・・双子なんだから仕方ないでしょ！

明月：むう~~~~

六花：それに数字だけが全てじゃあ無いでしょ・・・

夕月は物静かでおとなしいのに、君はどうして騒々しいのさ・・・

明月：明るくて元気だって言っつてよ！

それに悠姫君だって明るい子の方が好きに決まってるよう〜！

六花：へえ~~~~、明月ちゃんは悠姫君にご執心なんだ~~~~

明月：ふえ？・・・はうつ！・・・ふしゅー

！・・・

六花：あ、ショートした・・・

まあ、私に言わせれば、夕月は腰まである栗色の髪に大きなリボンと清楚でおとなしめのかわいさ、明月は腰まである栗色の髪をポニテールにまとめられていて、夕月とは違った活発さや元気が感じられるかわいさ、と十分違っているのに、どうして違いにこだわるのかな・・・

まあ、それはどうでもいいつか。そ〜れ〜よ〜り〜・・・はやく起きないと、どんどん進めちゃうぞ〜！

明月：・・・はう〜、待ってよ〜・・・

六花：明月ちゃんも復活したことだし、次の人行ってみよう！

明月：イエーイ！

・・・あれ、でもまだ紹介してない人なんていたっけ？

六花：こらこら日野達也を忘れちゃいかんだろ・・・

明月：ああ、そう言えばいたね、そんなのも・・・

六花：・・・何だか憐れだよ・・・

・・・まあ、そんなことは置いといて、達也のプロフィールはこんな感じだよ・・・

身長178cm、体重68kg、年齢は16歳（高2）、誕生日は2月9日、学内ランクNo.5（異名：紅蓮槍騎）

明月：よし、終わり！次、いってみよう！

六花：いや、流石にそれはかわいそうでしょ・・・

明月：いいの、いいの・・・！

後がつかえてるんだから、次々いってみよう！！

六花：もう、しかたないなあ〜

つづいて紹介するは、この方・・・ 玖瀬雅さんです。

明月：雅さん、とっても綺麗だったよね〜

優しくて、綺麗で、何でも出来て・・・ああ〜、お嫁にほしい〜
〜！

六花：はいはい、なに馬鹿なこと言ってるの・・・

雅のプロフィールはこんな感じ・・・

身長165cm、体重46kg、年齢は16歳（高1）、誕生日は
5月19日、学内ランク秘密

明月：えっ・・・雅さんて、うちの学校だったの！？っていつか学
校行ってたんだ・・・

六花：そうなんだよね〜・・・

いつも家事とか悠姫の世話とかしてるから、先に帰っちゃってるけ
ど、実は御剣学園の生徒なんだよね。

しかも、かなりの腕前・・・

明月：でも、ランクは秘密なんだ・・・？

六花：まあ、じきに判明するから、乞うご期待ということ・・・

明月：ふ〜ん・・・

そういえば、これで全員？主要メンバーはみんな紹介したと思うん
だけど・・・？

六花：ちっちっちっ・・・一人忘れてるよ。

悠姫のクラスの担任である耶城沙耶香先生をね・・・
って言うか、あなたも同じクラスだったでしょうが・・・！

明月：そう言えば・・・

一回しか出てこなかったから、忘れてた・・・

六花：まあ、これからも出てくるかわかんないから、簡単に紹介すると、肩までの茶色い髪に、茶色い瞳、そして32歳、独身、以上！
明月：いや・・・あの・・・それは流石に、私でもかわいそうになつてきたよ。

六花：そう・・・？まあ、ここは諸事情により省略させていただきましよう！

明月：これで、全員終わったみたいだけど、この後どうするの？

六花：う~~~~ん、それなら引き続き設定の紹介でもしましょうか・・・？

明月：そう言えば、作中ではあまりされてなかったよね、説明・・・

六花：と言うことで、この場を使って、ちゃちゃつとやっちゃいましよう！

舞台は神奈川県水無月市・・・

その中心に位置している、とある私立高校・・・
その名も私立御劔学園。

広大な敷地と多種多様の設備を備えたこの高校は、学費が非常に高いけれども、倍率も極めて高い、という人気高校なのです。

明月：私もここ受けるとき、すつごく苦勞したもん！あれは、今思い出しても勉強地獄だったよ・・・

六花：そんな高校に、一際異彩を放つ制度が存在します。

それは、武芸制度・・・

他者と強さを競いあい、その中で更なる強さの向上を目指すことを

目的とした制度です。

明月：強さに応じてランク付けがされていて、そのランクに応じて報酬も貰えるんだよ。

六花：これが目的で受験してくる人が、年々増加しているんだよね。

・

因みに、報酬をまとめてみると、こんな感じになります・・・

- No.1 (生徒会長)・・・学費免除、学内施設の優先的使用権、賞金(月10万円)
- No.2 (生徒副会長)・・・学費3分2免除、学内施設の優先的使用権、賞金(月8万円)
- No.3 (生徒副会長)・・・No.2に同じ
- No.4 (生徒会書記)・・・学費半減、学内施設の優先的使用権、賞金(月5万円)
- No.5 (生徒会会計)・・・No.4に同じ
- No.6 (生徒会事務)・・・学費3分の1免除、学内施設の優先的使用権、賞金(月3万円)
- No.7 (生徒会事務)・・・No.6に同じ
- No.8 (生徒会補佐)・・・No.6に同じ
- No.9～100・・・賞金(月1万円)
- No.101・・・無し

明月：こうして見ると七帝って、すごく優遇されてるよね。つて言うか、生徒会長って収入あるのに支出ないよ！

六花：まあ、勝利者の特典ってやつかな・・・

(こんな高校、あるなら見てみたい・・・)

明月：質問！ランクの入れ替わりの条件って何！？

六花：ランクはね、その人の成績と強さが反映してるの・・・
つまり、試験で高得点を取り、尚且つ年に3回行われる能力測定（
というか生き残りバトル？）で残り続けたら、あとは勝負に勝ち
続けることかな・・・

明月：よくし、今度の能力測定はがんばるぞ〜！

六花：そろそろ終わりの時間（文字数の限界）も近づいてきたこと
だし、最後に質問のありますか、明月ちゃん？

明月：キャラの名前の読みがわからない（読者からの声）

六花：う〜ん、簡単な字を使ってるけど、読みが変わってるのとか
あるからね・・・仕方ないか・・・

朝霧悠姫 あさぎりゆうき

華菱剣夜 はなびしけんや

水無瀬夕月 みなせゆき

水無瀬明月 みなせあき

日野達也 ひのたつや

玖瀬雅 くぜみやび

耶城沙耶香 やしろさやか

簡単なものもあるけど、一応全員書いてみました。

明月：読みついでに、No. これも何て読むのか教えて・・・

六花：ああ、それね・・・

そのまま読めばナンバー だけど、ここでは序列 位と読むんだよ。
・
・

明月：なるほど・・・というか、それなら初めからそう書けばいい

じゃん・・・！

六花：まあ、ここは「都合主義」といっていい・・・

(終)

明月：えっ・・・終わり？

こんな終わり方でいいの！？こんなのでいいの！？いや、だめだし
よっ~~~~・・・!!!!

六花：ちゃんちゃん・・・

明月：よっ~~~~!!!!

第七幕 へ新たな同居人！？

次の日も、空は快晴だった。

雲一つない、青々とした空・・・

それは、昨日と同じく見事な空模様だった・・・

そんな二日続きの空模様は、何か予感のようなものを感じさせる。

例えそれが、不吉な予感だったとしても・・・

今日も、今日とて、今日といえども、一日は始まるのである。

悠姫「ああ、煩わしい〜！」

学校への道半ばで、ついばやいてしまう悠姫。

先程から道行く人、道行く人の視線が嫌というほど注がれてくるのである。

雅「まあ、仕方ないですね・・・昨日の校庭での一件はかなりの生徒の目に入ってるみたいですし、日野達也との勝負も幾らかの生徒に見られていたようなので、おそらく学園中の生徒に知れ渡っているのではないかと・・・」

それを聞いた悠姫は・・・まあ、言わなくても伝わるだろう・・・
剣夜などが見たら、ひどく嘆くことだろう・・・
かわいい顔が台無しだよ・・・と。

悠姫「変装がばれたのはまずかったよな・・・」

雅「そうですね。悠姫はあまりに綺麗すぎますからね・・・」

悠姫「はあああ．．．」

雅の言葉にため息をつく悠姫．．．

まあ．．．その心中、わからないでもない．．．

簡単に言ってしまうえば、男なのに綺麗って言われてもなあ．．．だ。

雅「もうすぐ学園ですし、教室に入れば少しはマシになるでしょう」

悠姫「ああ．．．だといいけどな．．．」

奇しくも、彼の予感は的中するのだった．．．

それは、彼にとってある意味天からの助けであり、衆目から逃れられる事を内心では喜んでいた。

それは、校舎に入っただけで．．．下駄箱で靴を履き替えているときに知らされた。

『一年S組、朝霧悠姫。同じく玖瀬雅。至急、生徒会室に来なさい。もう一度、繰り返します。一年S組．．．』

因みにS組というのは特進クラスのことだ。

御劔学園では一学年を、上から順にS組、A組、B組、C組．．．といった感じで分けられている。中でも、S組は成績優秀者が集められたクラスなのである。あくまで、ペーパーテストの上で、だが．．．

と言ってもまあ、過去の話振り返ってみればわかることだが、変人の巣窟である。

悠姫「おいおい、いきなり呼び出しかよ……」
雅「私まで一緒とは、一体何でしょうか……？」
二人揃って首を傾げながら生徒会室に向かう。

コンコン……

悠姫「失礼します……」雅「失礼します……」

生徒会室に入ると、まず目に入ってきたのは、栗色の髪によく似た二人の女の子……夕月と明月だった。

一目みて感じたのは、二人の憔悴しきった様子だった。

特に、明月はいつもが元気なだけに、とりとめて憔悴ぶりが際立っている。

悠姫「ど、どうしたんだ、二人とも……何かあったのか!？」

尋常ではない二人の様子に、事情を確かめようとする悠姫であったが、それは横から割り込んできた声によって遮られた。

「朝霧君、二人を心配する気持ちは解るが、まずは私の話を聴いてくれないか……？」

ここで悠姫は、ようやく自分達の他にも数人の生徒がいることに気が付いた。

そして、今の声の主を確認したところで、悠姫はいすまいをただしきちんと挨拶するのであった。

悠姫「失礼しました、御劔会長。とんだところをお見せしてしまいました……」

そう、先程の声の主こそ、この部屋の主であり、多くの強者達が集うこの御劔学園においてトップに君臨している人、その人なのである。

また、苗字からもわかる通り、この御劔学園の創立者の家系である。その上、現理事長の息子で、次期理事長候補として名が挙がる程の人なのである。

その他にも、この場にいる生徒は七帝に名を連ねるものばかりだった。

No.6、No.7の水無月姉妹を除くとしても、No.8の景籍直晃、No.5の日野達也、No.4の倉敷籠女、No.3の華菱剣夜……

No.2を除く全ての七帝が集まっていた。

No.2……七帝の中でも、その名前を知る者は少なく、一般生徒に至っては皆無といって等しいだろう……

と言うのも、No.2が生徒会に出席したことはこれまで一度もなく、また生徒に公表もされていないため、知る機会がなかった、というのが理由である。

今では、その存在すら危ぶまれるといった有り様である。

何か理由があるようだが、その辺りも一切公開されてはいない……

御劔「いや、構わない。それより、早速だが本題に入らせてもらおう……」

皆の目が御劔会長に集まる。

御劔「君達に来てもらったのは、昨日の日野和也の一件の事なんだが……」

そこで、会長の視線が水無瀬姉妹の方へと移る。

御劔「昨晚、彼女達の家が日野和也によって放火された・・・」

その言葉を聞いた悠姫と雅が驚愕の表情を浮かべる。悠姫「あんの野郎、負かされたからって姑息なことを・・・！」
悠姫に至っては飛び出さん勢いだ。

雅も、普段あまり怒気を表さないにも関わらず、珍しく憤慨している様子が感じられた。

七帝はというと・・・

予め聞かされていたのか、表情に変化は見られないが、当事者である水無瀬姉妹はその時の光景を思い出したのか、顔色が白を通り越して青と言っても過言ではない有り様だった。

兄である日野達也にしても、申し訳なさで一杯なのか、非常にいたたまれない様子だ。

悠姫「それで、日野和也は！！あいつは今、どうなってるですか！」
雅「ちゃんと罪に問われるんでしょうね・・・？」
怒りのあまり感情的になる悠姫に対して、憤怒しながらも冷静にあくまで客観的に情報を整理しようとする雅。

御劔「もちろんだ。日野和也は退学処分の上、刑事処分かけられるだから、安心するといひ・・・」

放火は殺人に並ぶ重罪だ。

当分は・・・いや、少なくとも数年は刑務所暮らしだろう。
未成年ということ、幾らかは軽減されるかもしれないが、極刑は免れないだろう・・・

この話を聴いてようやく怒りを収めた二人であつたが、その顔はやりきれなさを物語っていた……

御劔「まあ、事件の話はここまでにして……朝霧君、君はこの二人がかわいそうだと思つかね……？」この、突然の会長の問いに少々戸惑つもの、はつきりと答える悠姫。

悠姫「ええ、もちろん思いますよ。彼女達に非はないんですから……」

御劔「では、ちからになつてあげたいと思つかね……？」

悠姫「ええ……」

この問いにも躊躇なく答える。

御劔「何かできることがあればしてあげたいと？」

悠姫「ええ……」

御劔「なら、暫くの間彼女達を君の家で預かつてくれなにか……？」

悠姫「ええ、いいです……よ？」

先程までのノリで、つい肯定の返事を返してしまう。

この悠姫の言葉を聴いた途端、御劔会長の表情に笑みが広がる。

御劔「そうか、そうか！了承してくれるか！では、早速……」

悠姫「ちょ、ちょっと待つてください！何でそうなるんですか！！それより、若い男女が同じ屋根の下というのは問題でしょう！！！！」
会長の話を守るように、悠姫の慌てた声が響く……
叫びにも似た……いやもう叫びとしか聴こえなかった……

御劔「ノープロブレムだ……既に君は玖瀬くんと一つ屋根の下で暮らしているではないか。だが問題が起こったという話は聴かない」
悠姫「それは……それは、雅は物心のついた頃には一緒に暮ら

してたし、俺にとつては家族みたいなもので・・・それ以前に！！俺がいいって言っても、二人が嫌がるでしょう！」

御劔「おやっ・・・ということとは、二人がオツケーなら良いのかね？」

悠姫「うっ・・・ほっとけないよな、困ってるみたいだし。う、うっ~~~~」

会長の言葉に、言葉を詰まらせる悠姫。

迷っているのか、一人で何やらぼやいている。

御劔「それなら問題ない。これは、彼女ら意思だ。だから、何も支障はない・・・という訳で二人とも、お許しがたよ・・・」

悠姫「なっ！ちよつと、待て！俺はまだ認めて・・・」

会長の話を聴いて、駆け寄ってくる夕月と明月・・・

いや、明月はどちらかというと・・・

明月「ありがとう~~~~悠姫君~~~~！」

夕月「あ、明月！そんなに走っちゃ・・・」

明月「ありゃ・・・」

その時、たまたま落ちていた一枚の紙切れに足を取られた明月・・・バランスを崩した明月、しかし加速をつけていた体は急には止まらない・・・

制御を失った体は、そのまま・・・

悠姫「あぐっ！！・・・あ、明月・・・てめえ、いい覚悟・・・してんじゃ・・・ねえか・・・」

明月の体当たりと肘をもろにボディにくらい、撃沈する悠姫なのであつた・・・

御劔「・・・玖瀬君」

悠姫を支えながら生徒会室を出ていこうとする雅を呼び止める御劔
会長・・・

御劔「・・・どうやら、日野和也の手下共が何か企んでいるらしい。
・・・No.2の君のことだから心配はいらないと思うが、くれぐ
れも二人の事を頼んだよ」

生徒会室から他の七帝がいなくなった事を確認し、それでも他人に
聞かれないように音量をおとして、雅に話しかける・・・

雅「ええ・・・わかっていますよ。悠姫もついていることですし、
何より彼女達自身がかなり強いですからね・・・きつと、大丈夫で
すよ!」

御劔「ああ・・・だといいたがね・・・」

御劔の不安を消し去るように、殊更明るく答えた彼女だったが、彼
の不安を取り除くには至らなかったようだ・・・

余談だが・・・

あの後、悠姫が意識を取り戻したのは、最後の授業が終わりを迎え
たときだそうな。

一体、何しに学校に来たのか分からない悠姫君なのであった・・・

次回予告

一緒に暮らし始めた悠姫くと水無瀬姉妹・・・

普通なら、嬉し恥ずかしのSchool Days（笑）のハズが・・・

明月には振り回され、雅には弄られ、そして・・・そして、常識人だと思っていた夕月には・・・

次回、《どたバタっ、同居生活!?!》

明月「お約束だよ、悠姫くん・・・」

雅「ええ、お約束です・・・」

悠姫「そんなお約束、いらねえ~~~~!!!!!!!!」

第八幕 へどたバタつ、同居生活！？

空は一面に晴れ渡り、鳥の囀ずりが聴こえてくる心地よい朝だった。窓から差し込む日差しは気持ちよく、なかなか起きようという気になれない。

つまり、何が言いたいかというと、朝霧悠姫は朝の惰眠を貪っていた。

いつもなら、こんなことはまずないのだが、昨日、一昨日と休まる 때가なかったためだろうか、一向に起きる様子はなかった。

まだまだ時間には余裕があるが、いつもならもう起きている時間である……

そのとき、部屋の扉が静かに開けられた。音を忍ばせて入ってきたのは……

明月「……悠姫くん、朝ですよ」。起きないとダメですよ」
囁くように悠姫に呼びかける明月。
起こす気があるのかないのか……

抜き足差し足で悠姫の元まで近づいていく……

明月「うっわ~~~~~……カワイイ寝顔~~~~！枕を抱いてるところなんかカワイイ~~~~……でもやっぱり、抱いてるなら大きなぬいぐるみの方が……」

おやおや、当初の目的からズレてますよ明月さん・・・いや、こちらの方が本命だったのか・・・

いや〜それにしても、男だとわかっていても、つい身悶えしてしまう可愛さだ・・・

明月「おっとつと、悠姫君を起こしに来たんだった・・・悠姫君、起きてよ〜、起きてよ〜」

いや、明月さん？

そんな囁き声じゃあ起きないでしょう、普通・・・

明月「もう、起きてって言ってるのに・・・そんな悪い子にはおしおきだよ」

つて、それが目的か〜！！！！！！

一歩、二歩、そして数歩下がり、勢いよくダッシュ・・・

明月「朝だよ〜！！！！悠姫く〜ん！！」

・・・そして、ダ〜イブ！！

何にかつて？

それはもちろん、目の前で寝ているかわいい人に向かって・・・

悠姫「はぐうつ・・・明月・・・てめえ・・・！！」

危うく眠りから覚める前に、更なる深い眠りにつくところだった・・・

二度と覚めることのない眠りに・・・

作者：まあ、冗談はこれくらいにして・・・

（悠姫「冗談ですむか!!!」）

何かきこえたようなあ・・・?

（悠姫「マジでいたかつたんだぞ!!!」）

ま、いつか

（悠姫「よくね〜〜!!!」）

二階でこんな騒ぎが繰り広げられていた一方で、一階では雅と夕月によるお弁当作りと朝ごはんの支度が進められていた。

雅「夕月さん、お料理はよくするんですか？」

雅がお弁当に具材を詰めながら、テーブルのセッティングをしている夕月に尋ねる。

夕月「はい。明月が家事を全くできないので、必然的にそうなりました・・・」

夕月と明月の両親は二人がまだ小さい頃、事故で亡くなっている・・・

その辺の情報は資料などで得ているため、特に深い事情については尋ねない。

雅「そうですか・・・では、これからは一緒につくりましょうか？」

夕月「はい!」

こちらは似た者同士ということもあり、うまがあつようだ。

食事の用意が整い、あとは食べるだけという段階になって、ようやく悠姫と明月は降りてきた。

悠姫「今度やったら二度とこの家に入れないからな!」

明月「もう、そんなに怒らないですよ。お約束だよ、お約束」
二人のやり取りを聴いていた雅が微笑みながら、横やりを入れる。
雅「そうですね、悠姫・・・お約束です。・・・明月さん、悠姫は
照れているだけですよ」

悠姫「人が気持ちよく寝ているところにダイブくらって、これが怒
らずにいられるか～～～～！！！！ってか、そんなお約束いるか～～
～～～～！！！！！！」

ひとり吼える悠姫。

しかし、他の三人は・・・明月「ねえねえ、夕月！眠ってる悠姫君、
とつてもかわいかったよ～～！！とくにね、枕を抱いてるところがす
ごく～～！！」

雅「そうですね！悠姫の寝顔はかわいすぎますよね。・・・一度、
枕をぬいぐるみに変えたことがあるんですけど、そのときのぬいぐ
るみに抱きついている悠姫のかわいさったら悩殺ものでしたよ」

悠姫「うわぁ～～あ～～～～。人のかわいさで盛り上がるな！そして、
見るな！！って言うか、雅は何やってんだ～～～～！！！！！！」

寝ているときの悠姫のかわいさについて盛り上がる二人・・・
そうすると、一人その姿を見ていない夕月は、非常に残念そうに・

夕月「いいなあ～～、雅さんに明月は・・・いいです、明日は私が起
こしに行きますから、そのときにじっくりと見させて頂きます！」
一人、決意を固めていた。

悠姫「見なくていい！見なくて！！というよりも見るな～～～～！！！！
！！！！」

なんども絶叫し、疲れたのか荒く息をつく悠姫。

その顔は羞恥と度重なる絶叫で、真っ赤に染められていた・・・

まあ、そんな姿もかわいいのだが・・・

おっと、これは本人には秘密のお話・・・

雅「それでは朝ごはんにしましょうか」

悠姫「・・・・・・・・」

悠姫は握りこぶしをプルプルさせて、何かを必死に堪えていた・・・

悠姫「だれか・・・俺の平穩を返してくれ・・・」

皆が席につくなが、一人呟く悠姫君なのであった・・・

事件はそう学園の帰り道で起こった・・・

その日の授業は終わり、部活に所属していない三人
夕月と明月は学園からの帰宅途中だった。 悠姫と

明月「ねえ、二人ともどこかで遊んでこよう・・・」

夕月「私は雅さんから、今晚のご飯の支度を頼まれてるから・・・」
今日は、雅が生徒会で一人遅くなるため、ご飯の用意を夕月にお願
いしていたのだ。

夕月という強力な助っ人の加入により、家事が半分で済むようになった雅は、長い間、参加できないでいた生徒会の様子を見に行ったのだ。

夕月も明月も、雅が生徒会だと聴かされたときは驚いていた。

そう言えば、何故この二人が生徒会に参加していないのかと言うと、単に呼ばれていないから……と言うより、門前払いをくらったからだ。

御劔会長曰く、今日は議論すべき案件もないので、二人とも帰りなさい、だ……

悠姫「そうだなあ……俺も今日は疲れたからパス」

二人とも行かないということで、明月が不満の声をあげる。

明月「ええ……行かないの……!？」

悠姫「今度一緒に行つてやるから我慢しろよ」

この言葉に、一転して喜色の面を露にする明月なのだった。

その様子を見ていた夕月が不平を口する。

夕月「あつ、明月ずるい！私も……」

私も一緒に行きます、と言おうとした夕月の言葉は悠姫によってさえぎられてしまった。

悠姫に押し倒されたのだ。

これには、いつも冷静な夕月も慌てふためく。

夕月「な、なんですか悠姫君！あのっ、こういうことはこんな場所ではなく……じゃなくて、二人きりのとき……あわわわ、ええ」

と、え〜と・・・」

頭がパニックを起こして、自分ですら何を言っているのか分かっていないのだろう。

この夕月の暴走に、悠姫は少々目を丸くしている。

悠姫「何を言ってるんだ？二人とも武器を構える。誰か知らんが、攻撃してきやがった！」

夕月と明月「えっ・・・」

先程、夕月が立っていた場所を見ると矢が刺さっていた。

悠姫が庇わなければ、間違いなく夕月に当たっていただろう・・・

悠姫の言葉に、すぐに武器を構える二人。

夕月は黒と白に塗り分けられた弓を・・・

明月は刀身が黒に染められた刀を・・・

辺りはいつのまにやら、何十人もの人ばかりでうめつくされていた。

悠姫「44・・・いや45か。ちよつと多いな・・・」

夕月「ええ、ですが・・・」

明月「やるっきゃないでしょう！」

三人が闘う意思を固め、攻撃にでようとしたとき・・・

男1「おい、その女！てめえは誰だ！」

この男のセリフに、悠姫達は揃って首を傾げる。

標的の情報を知らない筈がない。

とすると、ここには男！！であはざる悠姫しか存在しない・・・
悠姫「誰の事を言ってる？ここには、他に女なんて・・・」

男1「てめえの事だよ！黒髪の女！」

悠姫「なっ・・・！」

これには、流石の悠姫も絶句する。

その様子を、恐怖によるもの、と勘違いした男共が、口々に悠姫を侮辱する。

男2「すんげえいい女じゃないか！」

ピシッ・・・

男3「そそられるねえ・・・そのかわいい顔が、恐怖に歪むところをみてえなあ・・・」

ピシッ・・・

男4「他の奴らをやっちまった後で楽しんじまおうぜ・・・ギヒヒ・・・」

ピシッ・・・

下卑た笑いを溢す男達に悠姫の中で何かが少しずつ壊れていく・・・

一人俯いたまま肩を震わせている悠姫の姿に、夕月と明月の二人が慌ててとめに入る。

この二人には、悠姫が震えている理由が解っているのだ。

恐怖によるものではなく、限度のこえた怒りによるもの、であると・

夕月「あなた達、やめなさい！これ以上言ったら・・・」

明月「ゆ、悠姫く〜ん、落ち着こうねえ・・・どーどー・・・」

しかし、二人の頑張りは最初の男の一言によって、容易く打ち砕かれてしまった・・・

男1「そのかわいい顔を傷付けられなくなかったら、大人しく家に帰ってネンネでもしてな・・・！」

悠姫「っ・・・！」

悠姫の中で何かが音をたてて崩れさった・・・

それが何だったのかは分からないが、もしかすると悠姫の中に残されていた一欠片の理性だったのかもしれない・・・

悠姫は静かに、刀の柄に手を添える。

悠姫「二人とも・・・止めるなよ・・・・・・全員ぶった切ってる！！」

悠姫は夕月と明月にそう告げると、刀を抜くのだった・・・

次回予告

次から次へと切り捨てていく悠姫・・・

しかしながら、多勢に無勢・・・

いつまでも続けられる筈もなく、水無月姉妹の方にも刃がせまる・・・

・

しかし、そこに舞い降りたるは・・・

次回、《桃花の姫》

「天知る地知る子知る我知る・・・」

「悠姫に害なす者は、私が許しません・・・」

第十幕 〈訪れた平和・・・?〉

男達を捕らえた翌日・・・

この日は何時もと代わりなく、平穩に過ぎ去っていった・・・

御劔から呼び出しを受けたのは、そんな日の放課後のことだった。

曰く、

「昨日の騒動の事後処理について話したい。ついては、玖瀬君と水無瀬夕月君、明月君を連れて生徒会室に来てくれないか？」
と言つことらしい。

三人を伴って生徒会室を訪れると、そこには雅達を除く生徒会メンバーが揃っていた。

悠姫「なんかデジャヴ・・・」

生徒会室に広がる光景に既視感を覚える悠姫・・・

御劔「おはよう。四人ともよく来てくれたね・・・そんな所に立っていないでこちらに来たらどうだい？」

入ってきた四人に挨拶し、自分の方へ来るように促す。

悠姫「おはようございます、会長・・・」

三人「おはようございます・・・」

四人は揃って挨拶する。

御劔はそんな四人に笑顔を向け、引き出しから数枚の書類を取り出す。

そこには、今回の一連の出来事がまとめられており、男達の処遇が記されていた。

四人は静かに、その書類に目を通す。

一足先に読み終えた悠姫が会長に話しかける。

悠姫「犯行に及んだ男達ですが、思っていた以上に早くカタが着きましたね」

御劔「ああ・・・これで水無瀬の二人も安全だろう。そこでだ・・・」

そこで話を切ると、新しく何枚かの書類を取り出す。

悠姫「それは何です・・・？」

御劔「これは、こちらで用立てた水無瀬君達の新しい住居だよ。今のままの生活では、君も何かと不便だろう・・・そこで、せめてもお詫びにとこちらで用意したものだ・・・」

御劔会長が広げた書類は住居や土地の権利書だった。それに加えて、建物の外装や内装の写真が添付された間取図まで用意されていた。

お詫びと言っても、実際のところ生徒会にはなんら責任はない。

いくら生徒会とは言え、一人人らの言動にまで目を光らせている、というのは無茶というものだ。

今回のこれは、学園の生徒がしでかした事ということで、御劔に名

を連ねる者としてとった行動なのだろう。

悠姫「……いきなりですね？このあいだ引越してきたところだ
というのに……」

御劔「……そもそも二人を君の家に住ませたのは、二人の身を
守る為だ。君や玖瀬君がいれば、危険は無いと判断したからなんだ
が……その原因が取り除かれた今、彼女達を君の家に住まわせて
おく必要はなくなったからね……」

悠姫「まあ……そうですね」

御劔の説明に納得する悠姫……

悠姫にしても、彼女達との生活はイレギュラーであり、いつまでも
一緒に暮らすという訳にもいかない。

そこにこの申し出である。

悠姫としては、断る理由は一つも見つからない。

もつとも、その本心を言えば、

「ようやく、あの苦難から開放される」

であるが……

しかし、水無瀬姉妹のほうからしてみれば、この話は良いことばか
りというものでもなかった。

何せ、悠姫との生活が終わりを迎えてしまつたということである。

当然、二つ返事で頷くことなどできるはずもなく……

夕月「・・・少し、考えさせてください」

御劔「まあ、そう急ぐ話でもない・・・ゆっくりと考えて結論を出すといい・・・」

そこまでで話は終わりなのか、御劔は二回、手を叩いた。

すると、生徒会室の扉が開き、次々と現れる人達によって室内はみるみる間に、その姿を変えていった。

御劔「今回の事件が無事に解決したからね。ささやかながら祝勝会を開こうと思ってるね・・・」

悠姫達が呆気に取られている間に、ただでさえ広い生徒会室は装飾と料理で埋め尽くされていった。

・・・

祝勝会からの帰り道、陰鬱な様子で歩く人影一つ。

明月「まあまあ、悠姫くん・・・似合ってたんだから、良いじゃない」

グッさ・・・

悠姫「……………!!」

夕月「そうですね、確かに似合っていました……」
悠姫「……………っ!!!!!!!!」

シヨックが大きかったのか、壁に片方の腕をついて
落ち込んでいた。

悠姫「俺って……俺って……」

追い撃ちをかける夕月ちゃん……

しかし、そのことに気づかない。

明月「……やるね、夕月ちゃん!」

明月はそんな夕月に親指をピシッと立て、不敵に笑うのだった。

夕月「えっ……えっ……何がですか、何がなんですか……!」
「？」

明月に弄られていることにも気付かず、おろおろとする。

悠姫「俺は……俺は……俺は……」

そして、一人壁に手をつき、絶望という名の底なし沼に沈んでゆく
悠姫であった。

.....

雅「まったく、突然ですね・・・引越しにしろ、祝勝会にしろ、少しくらい話してくださいでもいいでしょうに・・・」

生徒会室に残って後片付けを手伝っていた雅が、御劔に愚痴をこぼす。

そんな雅に、苦笑を浮かべながら、謝罪の言葉を口にする御劔。

御劔「いや、悪かったと思っているよ。相談も無しに勝手に決めてしまったね・・・でも、まあ祝勝会はサプライズだからね。話したら、サプライズにならないじゃないか・・・」

雅「そうですが・・・」

御劔「それに、引越しにしても、あれは提案だからね・・・決めるのは彼女たちさ」

雅「そうですね・・・ですが、次からは一言くらい相談して下さいね。私だって生徒会副会長なんですから・・・」

水無瀬姉妹が、いま笑って悠姫と帰っていられるのも、全て御劔の采配のお陰と言えよう・・・

御劔は誰も見ていないところで、一人思案していたのだ。

御劔「ははは、まったく玖瀬君には敵わない・・・」

二人は笑みを浮かべながら、後片付けに勤しむのだった。

日付がもう少しで変わろうという時間、ベッドに入った明月は寝付けないでいた。

今日、御劔会長に言われたことを、頭の中で反芻していた。

明月「（新しい家かぁ・・・悠姫さんと一緒にいられなくなっちゃうよ）。夕月はどう考えてるんだろ・・・）・・・夕月、まだ起きてる？」

時間が時間だけに、もう寝ているかもしれないと思いながらも、隣の部屋にいる夕月に声をかけてみた。

夕月「・・・起きてますよ」

夕月は明月の予想に反して、まだ起きていた。

明月「今日言われたこと、どう思ってる？」

夕月「明月もそのこと考えていたの・・・私は出ていった方がいいと思うの。これ以上、悠姫さんに迷惑はかけられないでしょう？それに、あまり長く居ると・・・」

明月「長く居ると？・・・何？」

語尾を濁す夕月に、聞き取れなくて聞き返す明月だったが・・・

夕月「何でもないです！何でも・・・！」

慌てふためいた様子の夕月の声が返ってきただけだった。

自分の部屋に戻った明月は、既に意思を固めた様子の夕月に、『自分はどうしたいんだろう・・・』と考えている内に、その意識を微睡みの淵へと沈めていった。

祝勝会の日から、あっという間に一週間が過ぎた。

学園での明月はずっと上の空で、夕月が話しかけても生返事を繰り返すばかりであった。

家に帰っても、部屋に閉じ籠って、ご飯の時と学園に行くとき以外、顔を出すことはなくなった。

そんな明月を心配して、夕月も雅も思案を巡らせるが、何か良い方法が出てくる訳でもなく、結局のところ明月が自分の気持ちに決着を着けなければ何も解決しないということだ。

だが、その後押しをしてあげることくらいはできる。

この日も、晩ごはんを食べると、すぐに部屋に向かった明月であった・・・

夕月は雅の手伝いを終わると、そんな明月の元へと向かった。

夕月「明月、入りますよ……」

明月からの返事はないが、そのまま部屋に入る。

明月は頭まで布団を被って丸くなっていたが、そんな明月を見ても夕月は何も言わず、ベッドの縁に腰かけた。

夕月「ねえ、明月……？」

呼びかけてみるが反応はない。

そんな明月であったが、夕月は気にせず話しかけ続けた。

夕月「まだ、自分の気持ちが定まらないの？私には、既に決まってるように思えるのだけど……」

明月「……」

夕月「どうしてそんなに落ち込んでいるの？どうなることが、そんなに悲しいの？」

明月「……」

夕月「いつまで、そうしているの？……明月はいつだって自分の気持ちに正直で、思ったままに行動してきたでしょう？」

明月「……」

何も応えない明月……

聞いているのか、いないのか……でも、そんなことお構い無しに

夕月は続ける。

夕月「……こんなの明月らしくないですよ？悩んでも解決しないなら、いつもみたいに気持ちのままに動きなさい……」

告げたい事だけ告げると、夕月は明月の部屋を出ていった……

後に残されて明月は、ゆっくりとした動作で布団を捲り落とすと、困り顔で笑みを浮かべていた。

明月「もう……『お姉ちゃん』には敵わない……全部お見通しか……そうだよ、こんなの私らしくないよね！」

何かを決意したのか、明月の顔に先程までの暗さはなかった。

翌日は土曜日で、明月が部屋から出てきたのはお昼を回った頃だった。

明月「ねえ、悠姫くん……私と勝負してくれる？」

悠姫に勝負を挑む明月の様子は真剣そのもの……突然のことで、困惑を露にする悠姫だったが、その真剣さに圧され了承するのだった。

場所を中庭へと移し、対峙する明月と悠姫。

雅「では、審判は私が務めさせてもらいます……」
二人の間に雅が立ち、夕月は少し離れた位置からその様子を窺っていた。

明月「悠姫くん、お願いがあるの……」

悠姫「なんだ……？」

明月「もし……もし、私が勝つたら……このまま、ここに住ませてほしいの！」

このお願いもまた、悠姫を困惑させていた。

いきなりの勝負にしろ、このお願いにしろ、悠姫には明月が何をしたいのか、見当もつかないでいた。

悠姫「……？新しい家に何か不満でもあるのか……？」

悠姫は明月の我が侬を、単に新しい家に不満があるのだと勘違いしていた。

夕月「悠姫くん……」

雅「鈍感……」

二人揃って、悠姫に聴こえないように嘆息する。

悠姫「？・・・何か言ったか？」

二人「いいえ、何にも・・・」

そんな三人を見て、明月が笑い声を溢す。

明月「あははっ・・・違うの、悠姫くん。私がね、引越したくないのは・・・この四人での時間が楽しいからなんだ！もっとこの時間が続いて欲しいって、私が望んでいるからなんだ！・・・だから、私と勝負してください」

いつになく真剣な明月の様子に、悠姫は頭をかきむしった。

悠姫「わかったよ、やってやる。その願いを賭けた勝負。・・・だが、俺は一切手を抜かないからな。その願いを叶えたいというのなら、全力で俺を倒しに来い！」

悠姫の言葉に、刀を握る手に力がある。

明月「もちろん、そのつもりだよ！」

雅「・・・両者、準備はいいですね？・・・それでは、始め
！！」

まず、先攻を取ったのは明月だった。

軸足にギリギリまで体重をのせて、地面を蹴る。

一瞬の間に悠姫に肉薄し、斬りかかる。

悠姫からしてみれば、まさに突然目の前に現れたようなものだが、悠姫はその一撃を刀を抜く事なく、鞘の部分で受け流す。

明月は二、三步下がると、驚きで目を丸くするのだった。

明月「今の防げちゃうの！？たいていの生徒なら、今の一撃で決まっちゃうところなのに・・・」

悠姫「そうだな・・・予想以上だったよ・・・だが、俺も手を抜かないって言ったからな・・・そう簡単には決めさせないぜ！」

悠姫は明月との距離を詰めると、刀を振るう。

明月はそれを受け止めると、不満の声を上げる。

明月「どうして、鞘から抜かないの？」

悠姫「いくら死にはしないって言っても、女の子に刃は向けたくないからな・・・それが不満なら、実力で抜かせてみな」

明月は不敵な笑みを浮かべ、刀を握る手に力を込める。

明月「絶対、抜かせてやる〜！」

明月は一步下がると、身体を一回転させ、遠心力をのせて刀を一閃

させる。

しかし、悠姫はそれを読んでいたのか、明月が離れる刹那に刀に込める力を抜いていたため、体勢を崩すような事はなかった。

悠姫「あまい・・・！」

迫り来る刃を、自身の刀で軌道を逸らし回避すると、バックステップし、その反動を利用して加速する。

左肩を内側に深くいれ、勢いをつけて刀を振る。

本来、鞘から抜く勢いでつける威力を、膂力で補ったのだ。

明月は隙を突かれた格好となり、回避は間に合わない。

明月「くっ・・・！！！」

咄嗟に刃を立て、横からの一閃を防ごうとするが、抑えきれずに、刀ごと後ろに弾き飛ばされてしまった。

明月「いたたたたっ・・・」

何とか起き上がるが、あちこち擦りむいており、血が滲んでいた。

悠姫「・・・この程度か？もう、終わりにするか・・・？」

明月「まだまだ・・・このくらいじゃ終わらないよー！」

悠姫「・・・ふっ、いいぜ。かかって来いよー！」

悠姫と対峙して、明月は思考を巡らせていた。

明月「（・・・って言ってみたはものの、どう攻めたらいいんだよ
う！攻撃したら防がれるし、倍になって返ってくるし・・・カウン
ター狙っても、一撃目をかわせる自信ないし、第一そんな余裕与え
てくれないし・・・やっぱ、手数で攻めるしかないつか・・・
）」

明月は鞘を逆手に持つと、悠姫へと向かっていく。

初撃は刀による一撃・・・悠姫はそれをバックステップで回避する
が、明月は一步踏み込んで、鞘による一撃を見舞う。

悠姫はそれを刀で受け流すが、明月は体を回転させて三撃目を放つ。

悠姫「ちっ・・・」

悠姫が堪らず受け止めたところへ、鞘による更なる一撃・・・

無防備な横腹への攻撃に、「もらった！！」と心の中で叫ぶ明月。

しかし、悠姫は左手を鞘へと移動させ、右手で刀を抜くと、それを
防いだ。

明月「うそ〜！今の防いじゃうの・・・！！」

絶対に通ると思っていて攻撃を防がれ、驚く明月・・・
しかし、その驚きが明月に隙を生む。

悠姫は明月の力が一瞬抜けたのを感じると、明月の刀を弾き返し、肘うちをくらわせる。

明月「かはっ……！」

鳩尾に決まり、呼吸が一瞬詰まる明月……
堪らず、よるめいてしまう。

悠姫は躊躇うことなく、そんな明月に蹴りを入れる。

明月「うぐ……！！！」

後ろに吹き飛ばされ、地面を転がる明月。

明月「っ……」

刀を杖にして何とか立ち上がる明月だったが、身体は満身創痕……
立っているのがやっとの状態だった。

悠姫「俺に刀を抜かせたか……やるじゃないか明月。だが、もう
限界なんだろ？諦めて、降参しろよ……」

降参を呼びかける悠姫に対して、明月は首を横に振る。

明月「まだ、終わってないよ……私は……私は、まだ立ってる
！」

息も絶え絶えに答える明月だが、その目はまだ闘志を失っていないか
った。

明月「（力も技も負けてる……カウンターもダメ、数でもダメ……

・弱いなあ、私って・・・それに・・・強すぎだよ、悠姫くん・・・
・こんなんじゃ、全然勝てないね・・・でも・・・でもね、
私だって負けたくないんだよ。だから・・・だから・・・！！
！！

明月は刀を鞘に納めると、抜刀の構えをとった。

悠姫「へえ、そう来るか・・・でも、抜刀技は諸刃の剣だぜ」

先程も述べたように、抜刀技とは、鞘から抜く勢いを利用すること
によって、剣に必殺の威力を持たせる。

しかし、それは初撃に全てを賭けるということであり、それを防が
れてしまえば自分は無防備な状態になると言うことだ。

明月「この一撃に全てをかけるよ」

悠姫「そうかよ・・・なら俺も、それに全力で応えてやるよ！」

悠姫も刀を鞘に納めると、抜刀の構えをとった。

二人とも、静かに睨み合う。

そんな二人を、固唾を飲んで見守る夕月と雅・・・

静寂な時間だけが流れて行く・・・

先に動いたのは明月の方だった。
軸足に体重をのせ、地面を蹴る。

続いて、半テンポ遅れて、悠姫が動く。

突進するような勢いの明月に対して、流れるような動作で向かっていく悠姫。

二人の影が交錯する・・・

果たして立っているのは・・・

悠姫「ったく・・・無茶しやがって」

立っていたのは悠姫の方だった。

明月の方と言うと、気を失って倒れていた。

雅「・・・あなたもですよ、悠姫」

明月を部屋で休ませる為に担ごうと近付くと、途中で雅に遮られてしまった。

雅「最後の一撃・・・横腹に入っていたでしょう？」
そう言つて、問題の箇所に触れる雅。

悠姫「っ・・・！」

途端に、悠姫は顔をしかめる。

雅「あまり、無茶しないでください・・・明月さんは、私が部屋まで連れていっておきますので、悠姫は少しでも休んでください。明月さんが目を覚ましたら、呼びますから・・・」

明月が目を覚ましたのは、それから一時間後のことだった・・・

明月「・・・ううん・・・ここは・・・私の部屋？」

目を覚ました明月は、周囲を見渡して、此処が自分の部屋だと気付く。

明月「そうか、私・・・負けちゃったんだ・・・っ・・・」

悠姫に負けてしまったこと・・・
自分の力が至らなかつたこと・・・
想いを通せなかつたこと・・・

全てが緋い交ぜになって、明月に襲い掛かる。

明月「……っく……ひっく……っ……ひぐ……」

暫くの間、明月は声を押し殺して泣いた……

何れくらい時間が過ぎたのだろう……

窓から見える空は紅く染まり、外の街灯には明かりが灯っていた。

ドアがノックされる音に明月が顔を上げると、雅が立っていた。

雅「ごめんなさい、勝手に入ったりして・・・」

明月は静かに首を振る。

雅「大丈夫ですか・・・？まだ、辛いようなら休んでいていいですよ・・・」

明月「いえ・・・大丈夫です・・・怪我は大したことないから」

実際、目立つ怪我といえは最後に負った打ち身ぐらいで、あとはあちこちに軽い擦過傷があるくらいだ。

既に出血も止まっているので、二、三日もあれば完全に治るだろうが・・・

雅「いいえ・・・私が言っているのは、目に見える傷だけのことではありません」

明月の目は赤みを帯びており、まだ潤んでいた。

だが、明月は又もや首を振る。

明月「本当に大丈夫だから・・・」

笑顔を見せる明月に、雅はこれ以上深く追及するようなこともしない。

雅「そうですねか・・・なら、お話がありますので、リビングまで来て貰えますか？」

雅についてリビングまで行くと、そこには悠姫と夕月が椅子に腰かけて待っていた。

悠姫「もう、大丈夫なのか？」

心配して聴いて来る悠姫に、笑顔を向ける。

明月「うん、もう大丈夫だよ・・・」

悠姫「そうか・・・」

明月の答えに安心する悠姫だった・・・

明月「ところで、話があるって何の話かな・・・？」

悠姫「ああ、それはさっきの勝負の件だ・・・」

先程の勝負・・・この家に残れるか、出ていくかを賭けた、明月にとって一世一代の賭けに出た勝負だった。

明月はそれに負けたのだ。

明月「うん、わかってるよ・・・明日には出ていくから・・・いいよね、お姉ちゃん？」

夕月「私はかまいませんが・・・」

不意に明月に尋ねられて困惑する夕月は、その視線を雅へと移す。

その視線に気づいた雅は、優しく微笑んで頷く。

雅「その話なんですが………実は既に断ってあったりします」

明月「……………え？」

悠姫「……………はい？」

雅の言葉が脳に届かず二人揃って首を傾げる。

明月「既に……………」

悠姫「断った……」

明月と悠姫が意味を理解できずに、雅の言葉を繰り返すと、雅は再び笑顔で頷いた。

雅「はい……」

二人「ええええええええつ……!!!?」

何故か、悠姫まで一緒になって驚いている……

どうやら、雅からは何も聞かされていなかったらしい……

明月「夕月は知っていたの!？」

あまり驚いた様子のない夕月に、少し疑問に思った明月が問いかける。

それに対して、夕月は申し訳なさそうに、静かに頷いた。

夕月「話そうとしたんですけど、その時にはもう明月は意思を固めていましたから……」

明月「うう……ありがとう」

自分の知らないところで、実は話が着いていたことには納得がいかないようだが、自分の為に動いてくれた二人に感謝の念が込み上げてくる明月だった。

しかし、一人納得がいかないのが、この家の主である悠姫だった。

悠姫「ちょっと待て！俺は聞いてないぞ！」

もの見事においていけぼりをくらった悠姫が、声をあげるのだが・

雅「女の子が涙を流しているというのに、悠姫は何とも感じないのですか……！」

悠姫「え……いや、それはそうだが……」

いや、でも……、だが……、と一人呟いていると、そこへ雅の止めの言葉が降り注ぐ。

雅「なら、黙っててください……」

悠姫「はい……」

主としての威厳が形無しの悠姫だった……

この日、リビングには、和気藹々と話す三人の女の子の声と、反省猿のポーズをとった悠姫の自虐の声が響くのだった。

そして、時は戻り、追憶の旅から帰ってくる悠姫……

長い、長い、記憶の旅……でもそれは、時間に見れば一瞬の出来事だ。

多くの人に出会った・・・

良い出会いも、悪い出会いもあった・・・

ときには、闘うこともあった・・・

いや、ほとんどがそうだったのかもしれない。

全ては、二人を助けたことから始まったのだ・・・

悠姫「（それを運命だったと言うのなら、これもまた、運命なのかもしれないな・・・）」

悠姫は会話をうちきると、踵を返して家の方へと向かう。

明月「悠姫くん・・・!?!?」

悠姫「何してる？さっさと来ないか・・・来ないなら閉め出すぞ・・・」

悠姫の言葉に二人の顔が輝きだす。

二人「はい・・・!!」

顔を見合わせて頷き合つと、悠姫の元へと駆け出す。

これまで、静かだった生活に、少くらしい賑やかさが加わってもし
いかなと思える悠姫だった・・・

《後書き》

え〜〜、長らくお待たせしまして申し訳ありませんでした。

取り合えずは、この話が最終話となります。

納得のいかない方もいるかもしれませんが、お許しを・・・

しかし・・・！

これは、まだ B L A D E × A R M S の第一章に過ぎません。

取り敢えず、次は違う作品を書こうと思っ
ていますが・・・

ただし、変わらず更新速度は遅い
と思います。

こんな私ですが、これまで同様、この先も読んでいただけると嬉しいです。

最後になりましたが、ここまでお付き合い頂き、本当にありがとうございました。

それでは……………え？
カンペ？何々……………

次回予告？

水無瀬姉妹の事件にカタが着き、祝勝会を開く生徒会……………

テンションは徐々に上がっていき、騒がしさは頂点に達する……………

盛り上がる一同……………

しかし、それは悠姫を陥れるために張り巡らされた、巧妙な罠だった……………

次回、番外編《YMCの悲劇》

明月「大丈夫、大丈夫……………恥ずかしいのは一瞬だけだからね……………」

┌

剣夜「そうそう・・・」

悠姫「説得力が無いんだよ！お前らの顔が全て物語ってんだ！」

ショートストーリーをお楽しみに・・・？

幕間2 〈YMCの悲劇〉

それは、あつという間のできごとだった。

会長が二回手を叩くと、突然生徒会室のドアが開き、大勢の人が入ってきて内装をみるみる間に変えていった。

そして、その人達が扉から出ていく頃には、湯気を立てる美味しそうな料理や数多くの飲み物がところ狭しとセッティングされていた。その様子を眺めていた悠姫、夕月、明月の三人は、開いた口も塞がずに、少しはしたない格好で呆然としていた。

悠姫「あ、あー……………」

明月「え…………えと……………」

夕月「……………」

雅は予め知らされていたのか、それとも予想していたのか苦笑を浮かべていた。

御劔「さあ、準備は整った……祝勝会を始めようか！」

御劔の一声で祝勝会は始まった……

ある者は料理に舌鼓を打ち、またある者は友との談義に花を咲かせている。

皆は思い思いの時間を過ごしていた。

悠姫も料理を食しながら、夕月や明月との会話を楽しんでいた。

御劔が再び手を叩いたのは、それから少ししてからだった。

御劔「さてさて、場の空気も温まってきたところで、YMC企画へと移ろうではないか……！」

YMC企画と聞いた悠姫達が首を傾げる。

生徒会である夕月や明月も知らされていないようだ。

雅「御劔会長、本当にするんですか？知りませんよ、どうなっても……」

いつの間にか御劔の側まで近づいていた雅が、こっそり耳打ちする。

御劔「まあまあ、いいじゃないか。それでこそそのサプライズじゃないのかい？」

雅「そうですが……」

まだ渋々といった感じの雅だが、御劔は企画内容の説明へと入る。

御劔「この企画は簡単に言ってしまうえば、ゲームをして楽しもうということだ。ゲームは何種類があるのでその中から選択となるが、

もちろん勝負の世界であるからして、敗者に何も無いと言うことはありえない・・・敗者には当然罰ゲームを受けてもらう」

御劔が企画内容を話し終えたところで、明月が質問する。

明月「会長、ルールはわかりましたけど、その罰ゲームって何するんですか？」

御劔「罰ゲームの内容かい？いいだろう、はなしてあげよう・・・」

御劔が指を鳴らす。

すると、数人の女性が生徒会室に入ってくる。この女性達は皆、御劔家で雇っている使用人である。

その女性達によって特設のステージが造られ、様々な衣装が持ち込まれる。

御劔「罰ゲームの内容は、簡単に言ってしまうえばコスプレだ・・・」

コスプレという単語に他の皆がどよめく。

御劔「普通の衣装から一風変わった衣装、恥ずかしい衣装と多種にわたってあるなかから着てもらう。もちろん、敗者に選択の意思はなく、着てもらう衣装は勝者が決める。その上、祝勝会が終わるまですつとそのままでもいいもらう」

御劔が内容を説明している内に設営が完了したのか、いつの間にか女性達はいなくなっていた。

内容を聞き終えた一同はまだざわついていていた。

流石に人前ということもあり、恥ずかしいのだろう・・・

現に、悠姫はたいへん嫌そうな顔をしている。

それに対して明月や夕月なんかは、どんな衣装があるのか楽しそうに物色していた。

御劔「さあ、それでは始めようか。まず、最初のゲームは私が決めさせていただくよ」

そう言つて、会長が取り出したのはトランプだった・・・

御劔「ゲーム内容はポーカーだ。ルールを知らない者はいるかい？」

誰も挙手はせず、皆ルールを知っているとのこと、早速ゲームは始められた。

これが後に悠姫を苛む悪夢になるうとは、このときは誰一人として知るよしもなかった。

いや、会長だけは知っていたのかもしれない。それとも狙っていたのだろうか・・・

そうでなければ、この企画にあんな名前をつける筈がないのだから。

YMC企画・・・

Y 悠姫くんを

M めちゃくちゃ可愛い

C コスプレさせちゃおう

などという名を・・・

御劔「・・・Kのフォーカードだ」

明月「ウソ・・・また会長の勝ち!？」

夕月「それで負けたのは今回も・・・」

皆の視線が一人に集中する。

悠姫「そ、そんな可哀想なものを見る目で俺を見るなあ・・・!!」

そう・・・なんと1ゲーム目から今のゲームまでずっと負けっぱなしの悠姫。

遂には・・・

御劔「今の負けで持ち金がゼロになったね・・・それでは、罰ゲームを受けてもらおうか？」

悠姫「ひっ・・・」

会長が取り出したのはチアガールの衣装だった。

その衣装を見た他の皆から様々な悲鳴が上がる。

雅「会長！いくらなんでもそれは・・・！」

夕月「（うんうんうんうんうん・・・）」

幾ら見た目が可愛いと言っても悠姫は男の子である。

女の子の衣装・・・それもチアガールといった女の子色全開、加えて超ミニスカートな衣装に同情の声上がる。

しかしながら、それに反して寧ろ悠姫のチアガール姿を見たいという声も少なくはなかった。

その筆頭が何を隠そう明月や剣夜なのだから流石に同情を禁じ得ないところだ・・・

明月「悠姫くんのチア姿・・・会長、グッジョブ！」

御劔に親指を立てる明月に対して、御劔も親指を立てて返す。

御劔「だろう、水無瀬君？さあ、朝霧君にはこの衣装を着て皆の応援でもしてもらおうかな」

衣装を持って迫ってくる御劔に悠姫が後退る。

悠姫「い、嫌だ・・・そんな衣装・・・絶対・・・」

しかし、数歩さがったところで明月と剣夜に左右を固められ、身動きが取れなくなった。

剣夜「悠姫、諦めが肝心だよ」

明月「そうそう、諦めてコスプレしちやえ！」

悠姫「おゝまゝえゝらゝ・・・」

薄情な二人に怒りで震える悠姫だったが、残酷にも更衣室の中へと放り込まれてしまった。

その中で待ち受けていたのは、先程いなくなった筈の御劔家の使用人達だった。

使用人「ようこそ、朝霧様。・・・それでは、時間も少ないことですし、早速お着替えいたしましょう」

右にはトップを持った女性、左にはアンダーを持った女性、そして正面には両手をにぎにぎと妖しい動きをさせる女性に囲まれ、その上背後はいつの間にか壁へと変わっており、まさに八方塞がりな状況に悠姫が悲鳴を上げる。

悠姫「ひいひいひいひいっつ・・・だ、だれか！誰か！そうだ、雅！た、助けてくれ！？」

雅「すみません、悠姫・・・」

悠姫の救いを求める声に外で合掌する雅だった。

それから暫くした後、カーテンの内側から使用人の女性の一人が出てきた。

その額はうつすらと汗ばんでいて、その顔は一仕事終えたかのように晴れ渡っていた。

使用人「皆様、準備が整いました」

御劔「ご苦労だったね、綾音さん

綾音「いえいえ、私共も楽しませて頂いております……それでは皆様、ご覧くださいませ」

サーツとカーテンが開き、そこから現れた悠姫くんは……

一同「……………」

御劔「これはこれは……」

悠姫くんはなんとと言えば良いのかわからないが、超絶に可愛かった。

それは、この場にいる皆が見惚れてしまう程に……

明月「ゆ、悠姫くん……!!?」

夕月「……………!!」

雅「悠姫ですよね？」

女性陣の心の内は描写するまでもないだろう。
彼女達の第一声が何よりも雄弁に物語っている。

剣夜「見違えたよ、悠姫・・・とっても綺麗だよ」

御劔「ああ・・・美しい、美しいよ朝霧君。是非とも私と一緒にワ
ルツを踊ってくれないか、と申し込みたいところだね」

男性陣からも贈られてくる美辞麗句。

それらに、遂に悠姫の忍耐も限界を迎える。

悠姫「お前ら・・・いい度胸してるな・・・」

御劔「おっと、負けて罰ゲームさせられて怒るのは、ちょっと男ら
しくないのではないかな・・・？」

悠姫「うぐっ・・・」

女性の格好をさせておいて男らしいも何もあつたものじゃないが、
日頃から女性に見られがちな悠姫はその言葉についつい反応してし
まう・・・

御劔「さあ、それでは、張り切って2回戦を始めようか・・・」

続いて選択されたのは、同じトランプから神経衰弱だった。

ここで力を発揮したのが夕月だった。
なんと一人目で全部捲ってしまったのだ。

雅「ゆ、夕月さん……」

御劔「いや、まさか、水無瀬君にこんな特技があるとは……完敗だよ」

明月「さっすが……いつもの事ながら、記憶力はずば抜けていいよね」

皆が驚き、賞賛を贈られるなかで、夕月は恥ずかしさのあまり顔を俯けていた。

夕月「あ……う……」

しかしながら、こうなってくると問題が一つ……

明月「あ……夕月が一人勝ちしちゃったけど、この場合って罰ゲームどうなるの？」

一人を除いて皆ゼロ枚なので、本来なら仕切り直しをしてもいいところだが……

実際、悠姫もそう考えて安心仕切っていた。

しかしながら、そうは問屋が卸さなかった……

御劔「もちろん・・・水無瀬夕月君を除く全員に罰ゲームを受けてもらう」

悠姫「なっ・・・！！！！」

雅「悠姫・・・」

そんな悠姫を不憫に思う雅だったが、かける言葉が見つからない。

明月「あはっ、残念だったね、悠姫くん・・・」

悠姫「うっさい！！」

御劔「さあ、それでは皆に着せる服を選びたまえ・・・」

夕月「え・・・は、はい！・・・え〜と・・・」

夕月が一人、皆の服を物色する。

他の皆は真面目な夕月が選ぶ服に興味津々だった。

悠姫も夕月が選ぶということ、心の奥底では少なからずホッとしていた。

夕月「・・・それでは、これで・・・」

夕月が取り出したのは着ぐるみだった。

イヌやネコ、キツネにタヌキなど数種類の中から各々にチョイスし

て行く……

明月「あっ！わたしリスだ！嬉しい……」

御劔「おや、私はキツネかい」

剣夜「僕はイヌみたいだね……」

皆、自分にあてられた衣装を確認していく。

所々で納得の声や喜びの音が聞こえるなかで、悠姫は一人身体を震わせていた。

チアガールの衣装から解放されたのが、そんなに嬉しいのだろうか？

悠姫「……な、なな……何じゃこりゃああああ……！！」

悠姫が着せられたのは、女性物の服だった……レースがふんだんに装飾された白色のブラウス、赤と黒のチェックのブリーツスカートに黒タイツ……仕上げに頭には黒い猫耳とお尻には黒い尻尾が生えていた。

一応はネコということらしい……

だが、他の人が着ているようなモコモコとした衣装とは異彩を放っていた。

夕月「か、かわいい……」

明月「ナイス、夕月！」

御劔「おやおや、可愛らしい格好だね・・・」

剣夜「似合ってるよ、悠姫・・・」

皆がかかる言葉に、次第に悠姫の顔が怒りに歪められていく・・・

悠姫「おゝまゝえゝらゝ・・・」

雅「悠姫、ちょっとこっちを向いて下さい！」

不意に呼び掛けられて、悠姫はそちらを向く・・・

パシャツ・・・

カメラのフラッシュが閃いた。

悠姫が振り向いた先では、雅がカメラを抱えたまま満足げな表情を浮かべていた。

悠姫「み、雅？まさか、この姿を・・・」

雅「はい！バツチり撮りました！」

雅にしては珍しく語気を粗くしている。

悠姫の顔色は次第に青ざめていき、終いには死人もかくやと言わんばかりである。

悠姫「頼む！！頼むから今すぐ消してくれ！」

土下座をせんばかりの勢いで雅に詰め寄る悠姫・・・

しかし、雅は・・・

雅「お断りです。これは、私の宝物にします！」

悠姫「やめてくれ〜！！」

悠姫の叫びも虚しく、悠姫の恥ずかしい写真は永久保存された。

この後も、悠姫はゲームに負け続け、様々な衣装に着替えさせられるのだった。

そして、雅のコレクションは着々と増えていった。

こうして、この祝勝会は幕を閉じ、皆が楽しいと思えた時間は終わりを迎えた。

唯一、一人を除いて・・・

悠姫「……これは夢だ……夢なんだ……誰か、そうと言ってくれ……」

この日の出来事は、悠姫に消えることのないトラウマを残すものになった……

《あとがき》

この話を読んでくださってる皆様、更新が非常に緩慢で申し訳ありません。

それでも、読んでくださる皆様に感謝の気持ちで一杯です。

BLADE × ARMSはこの話を持ちまして第一章完結となります。

前にも述べましたように、続きは書くつもりですが、その前に違う作品を予定しています。

このサイトに来てくださる皆様が少しでも楽しい、良かったと思えるよう努力致しますので、是非、今後ともよろしくお願い致します。

最後に、もしこの作品に少しでも心が揺れ動かされたならコメントを頂けると嬉しいです。

それが私の励まし、活力源となりますので、是非ともお願い致します。

長々と書いてしまいましたが、それではここまでお付き合いください。皆様、本当にありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6457s/>

BLADE × ARMS

2011年10月9日00時20分発行